

松 戸

長野県上伊那郡宮田村

松戸遺跡発掘調査報告書

1976

南信土地改良事務所

宮田村教育委員会

松 戸

長野県上伊那郡宮田村
松戸遺跡発掘調査報告書

1976

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会



地神様出土の長頸壺（鎌倉時代）

序

松戸遺跡は、本村の西方押手沢扇状地端にあり、標高720mを数える。遺跡の西側に隣接して中央道が通過している。

この遺跡は昭和28年の埋蔵文化財調査の際発見されたものである。今回の発掘は、昭和51年度県営圃場整備事業の実施区域となり、止むを得ず発掘調査の次第となった。

調査の結果、縄文時代早期・中期・平安時代の遺構・遺物が発見・検出された。また隣接する熊野寺本堂跡遺跡（昭和49年、中央道遺跡調査団により発掘・調査）との関係についても、手がかりを得られたことも、大きな収穫であった。

ここに報告書を刊行するにあたり、関係各位の御協力に対し、深甚なる謝意を表すると共に、この報告書が~~些~~かなりとも斯界の御役にたてば、幸いである。

昭和52年3月

宮田村教育長 林 金 茂

例　　言

- 1 本報告書は、南信土地改良事務所の計画した宮田村圃場整備事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査として行なわれた、宮田村松戸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し、実施した。
- 3 本報告書は、契約期間内にまとめる事が要求されており、調査結果の綿密な検討や研究の時間が十分にとれなかったので、検出された遺構・遺物をできるだけ図化することに重点をおいた。
- 4 資料作成では、土器実測を赤羽義洋・田畠辰雄、土器拓影を小池幸夫・保科徳子、石器実測を田畠が担当し、それらの製図は丸山やよい・田畠が担当した。「宮田村内遺跡にみる陶磁器出土状況表」は友野良一が、「石器組成表」は田畠が作成した。
- 5 土器復原は、小木曾消が担当した。
- 6 遺構・遺物の縮尺は各図に示してある。
- 7 遺物の番号は、各住居址挿図中の番号を意味する。
- 8 写真撮影は、遺構は友野・遺物は赤羽・友野が担当した。
- 9 本文執筆は、各遺構を丸山、出土遺物を赤羽が担当し、まとめは友野・赤羽が担当した。
- 10 本書の編集は、丸山・赤羽が担当した。
- 11 遺物及び図化資料は、宮田村教育委員会で保管している。
- 12 出土遺物に関して、赤羽一郎氏（前・常滑陶芸研究所勤務）のご教示を得た。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観	1
第1節 遺跡の位地.....	1
第2節 地質・層序.....	2
第3節 周辺の遺跡と歴史的背景.....	3
第Ⅱ章 調査の経過.....	6
第1節 調査に至るまで.....	6
第2節 調査の組織.....	7
第3節 調査の経過.....	7
第Ⅲ章 調査の結果.....	9
第1節 遺跡の概要.....	9
第2節 繩文時代の遺構と遺物.....	11
第3節 平安時代の遺構と遺物.....	34
第4節 その他の出土遺物.....	36
第Ⅳ章 ま と め.....	40

挿 図 目 次

図1	松戸遺跡の位置	1
図2	松戸遺跡の層序	2
図3	縄文時代早期の遺跡分布	3
図4	縄文時代中期の遺跡分布	4
図5	古墳時代～中世の遺物を出土する遺跡分布	5
図6	グリッドの設定	9
図7	遺構の概略 (1:1200)	10
図8	落ち込みを伴うマウンド (1:60)	11
図9	落ち込みを伴うマウンド	12
図10	縄文時代早期の土器拓影 (1:2)	13
図11	第1号住居址 (1:60)	14
図12	第1号住居址出土の遺物 (土器1:6 石器1:3)	15
図13	第1号住居址出土の土器拓影 (1:3)	16
図14	第2号住居址 (1:60)	17
図15	第2号住居址出土の埋甕土器	18
図16	第2号住居址出土の遺物 (土器1:6, 石器1:3)	19
図17	第2号住居址出土の土器拓影 (1:3)	20
図18	第2号住居址出土の土器拓影 (1:3)	21
図19	第3号住居址 (1:60)	22
図20	第3号住居址出土の土器 (1:60)	23
図21	第3号住居址出土の土器拓影 (1:3)	24
図22	第4号住居址 (1:60)	26
図23	第4号住居址の埋甕に使われた土器 (1:6)	27
図24	第4号住居址の香炉形土器 (1:6)	27
図25	第4号住居址出土の石器 (1:3)	29
図26	第4号住居址出土の土器拓影 (1:3)	30
図27	第6号住居址 (1:60)	31
図28	第6号住居址出土の土器 (1:6)	31
図29	第6号住居址出土の土器拓影 (1:3)	33
図30	第2号土塙 (1:60)	33

図31 第5号住居址 (1:60).....	34
図32 第5号住居址出土の遺物 (1:3)	35
図33 第5号住居址出土の土器拓影 (1:3)	36
図34 その他の出土遺物 (土器 1:6, 石器 1:3)	37
図35 その他の出土土器拓影 (1:3)	38
図36 その他の出土土器拓影 (1:3)	39
図37 地神様出土の長頸壺 (1:4)	43

表 目 次

表1 宮山村内遺跡にみる陶磁器出土状況.....	5
表2 純粋式土器片の肉眼観察.....	11
表3 第1号住居址内のピット.....	15
表4 第1号住居址出土の石器.....	15
表5 第2号住居址出土の石器.....	18
表6 第2号住居址内のピット.....	22
表7 第3号住居址内のピット.....	25
表8 第3号住居址出土の石器.....	25
表9 第4号住居址出土の石器.....	28
表10 第4号住居址内のピット.....	28
表11 第6号住居址内のピット.....	32
表12 第6号住居址出土の石器.....	32
表13 第5号住居址内のピット.....	35
表14 第5号住居址出土の石器.....	35

図版目次

- 図版1 遺跡の位置（東より撮す） 発掘の開始（西より撮す）
- 図版2 発掘された遺跡（北半部） 発掘された遺跡（南半部）
- 図版3 繩文時代早期の土器（表） 繩文時代早期の土器（裏）
- 図版4 繩文時代早期の土器（表） 繩文時代早期の土器（裏）
- 図版5 第1号住居址 第1号住居址出土の土器
- 図版6 第2号住居址 加曾利E式土器と曾利式土器 住居址内の配石？ 蓋石のある埋甕の断面
- 図版7 第2号住居址出土の土器
- 図版8 第2号住居址出土の土器 第2号住居址出土の石器
- 図版9 第4号住居址 緑石のある炉 扁平な蓋石のある埋甕 埋甕に使われた土器
- 図版10 第4号住居址出土の香炉形土器 香炉形土器と立石 第4号住居址出土の土器
- 図版11 第4号住居址出土の石器
- 図版12 第4号住居址出土の石器 第5号住居址覆土から出土した石器
- 図版13 第3号住居址 緑石の抜かれた炉 土器片の集中出土 住居址内の集石？ 土器片の集中出土
- 図版14 第3号住居址出土の土器と石器
- 図版15 第3号住居址出土の土器 第3号住居址出土の石器
- 図版16 第6号住居址 3号住居址と6号住居址の炉の重なり 緑石が二重に巡った6号住居址の炉 3号住居址の貼床下から出土した土器片
- 図版17 第6号住居址出土の石器 多くの礫に覆われていた2号土括 完掘後の2号土括
- 図版18 第2号住居址付近出土の土器
- 図版19 各グリッド出土の土器 各グリッド出土の石器
- 図版20 各グリッド出土の石器
- 図版21 第5号住居址 露出したカマドの石 カマドの付近から出土した土師器 カマドのカットと土師器の石器
- 図版22 第5号住居址 カマドの横の貯蔵穴？と出土した平瓶の破片 炭化した木製品の出土 石膏で固めて慎重に取り上げる
- 図版23 第5号住居址出土の土師器 第5号住居址出土の土師器片
- 図版24 各グリッド出土の陶磁器
- 図版25 旧い地神様 新聞社の取材 新しい地神様 松戸遺跡発掘メンバー

第Ⅰ章 遺跡の概観

第Ⅰ節 遺跡の位置

宮田村は本州のほぼ中央に位置し、赤石山脈と木曾山脈にはさまれた伊那谷を流れる天竜川流域にある。遺跡は宮田村南割の松戸地籍に存在し、標高は720~730mで、西には木曾山脈駒ヶ岳がそびえている。巨視的には、遺跡は天竜川の大きな支流である太田切川の形成した広大な扇状地上にあり、南は寺沢川で、北は押手沢川で区切られた段丘上にある。この段丘は寺沢川の形成した小さな扇状地が浸食されてできたものであろう。また、遺跡地は全体に北西から東南へ若干傾斜しており、西側は昭和49年に調査した熊野寺遺跡で、そこから山地へと続いている。遺跡の現況は、畑地・水田と宅地で、一部山林を含む。東西約300m、南北約200mである。(熊野寺付近には湧水があったらしい痕跡があり、寺沢川からの引水により耕地の拡大を行ったのは中世以降のことであろう)。現在利用されている用水は、寺沢川より引水した形になっているが、古くは押手沢の水も流れていのではなかと思われる。

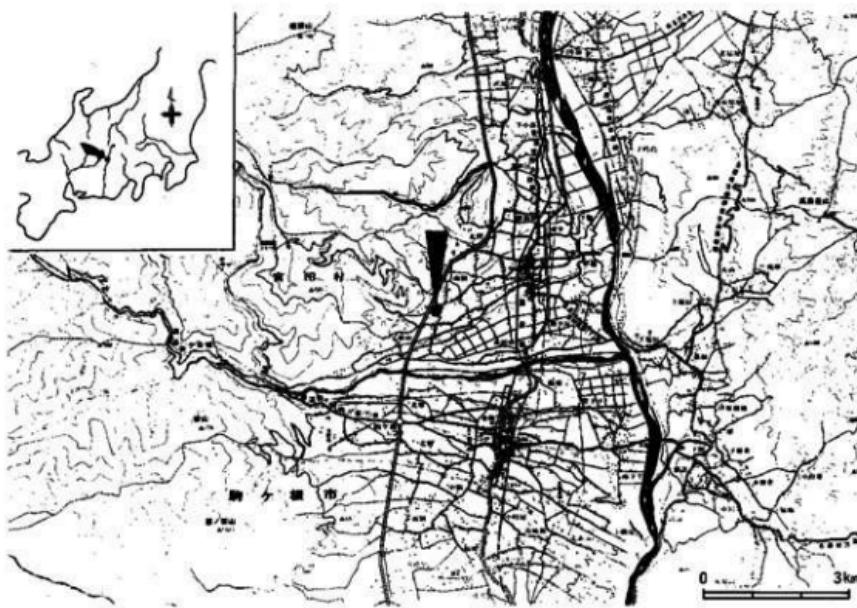


図1 松戸遺跡の位置

第2節 地質・層序

宮田の西山麓地帯は、都下でも有名な断層地帯である。新田の大平などが一番新しい時期の断層であり、代表的なものである。押手沢に見られる断層は、地質的に有名である。その地質構造は、縞状片麻岩・黒雲母花崗岩・白雲母花崗岩等が母体となって組成されており、今も活動中の断層地帯である。それ等の岩石を基盤として山に降った火山灰土が、砂礫とともに流出して過剰堆積したのが押手沢扇状地の地質である。図2の層序からも、その流出、堆積状況が明確に認められる。IV層からVII層までの間には、少なくとも2、3回はそのような流出堆積があったと考えられる。またIX層の黒色土層の下のX層の黄色砂質土も同様のものと思われる。

層序説明

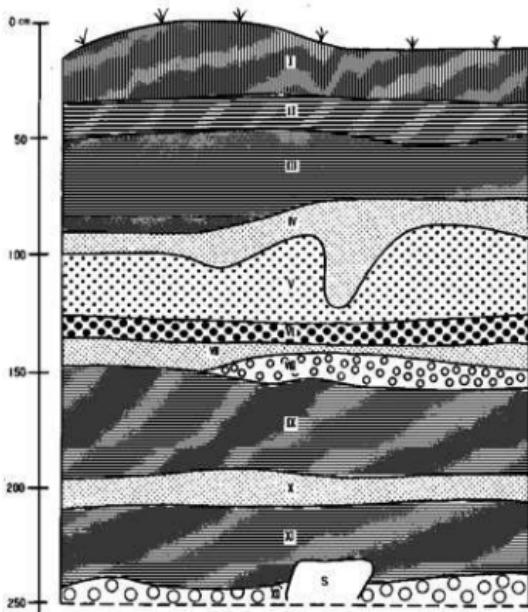


図2 松戸遺跡の層序

第I層	耕土・小礫混
第II層	黒褐色・小礫混
第III層	黒色・小礫混
第IV層	黄色砂質・小礫混
第V層	黄色砂質・黒土混
第VI層	黄色砂礫
第VII層	黄色砂質
第VIII層	砂礫
第IX層	古期黒色土
第X層	黄色砂質土
第S層	古期黒色土
	砂質含・ローム

第3節 周辺の遺跡と歴史的背景

松戸遺跡は昭和28年の埋蔵文化財分布調査によって確認された遺跡である。西方山麓には、昭和49年に中央道調査団によって発掘調査された熊野寺本堂跡が位置していることから、その関連性が注目されるところであった。昭和29年、2631-1番地地籍の水路工事の際、中世陶器が出土している。その後、加藤暢快氏の水道工事中に縄文時代中期の深鉢が出土し、遺跡の時期的な性格が次第に明らかになった。昭和39年、加藤暢快氏宅裏の地神様の新しい石碑建立のために工事を行なったところ、旧石碑の下部より、火葬骨の入った長頸壺が出土した。この長頸壺は地神の研究に重要なものと考えられ、加藤氏宅に保存されることとなった。名古屋大学教授檜崎彰一氏の長野県下の陶器の調査の折、この長頸壺は、生産地は常滑、時代は鎌倉時代であることが確認された。

隣接する熊野社、熊野寺の薬師如来像・聖観音像の造像の時期も同じころであり、地神様はそれらとの関連性が考えられ、松戸地籍の表面採集が続けられていた。

今回の発掘調査の結果、当遺跡からは縄文時代早期・中期の遺構・遺物が確認されたほか、中世陶器片が出土した。周辺遺跡の分布状態は、これら縄文早期・中期、中世の遺構・遺物を出土している遺跡に限ってふれてみたい。

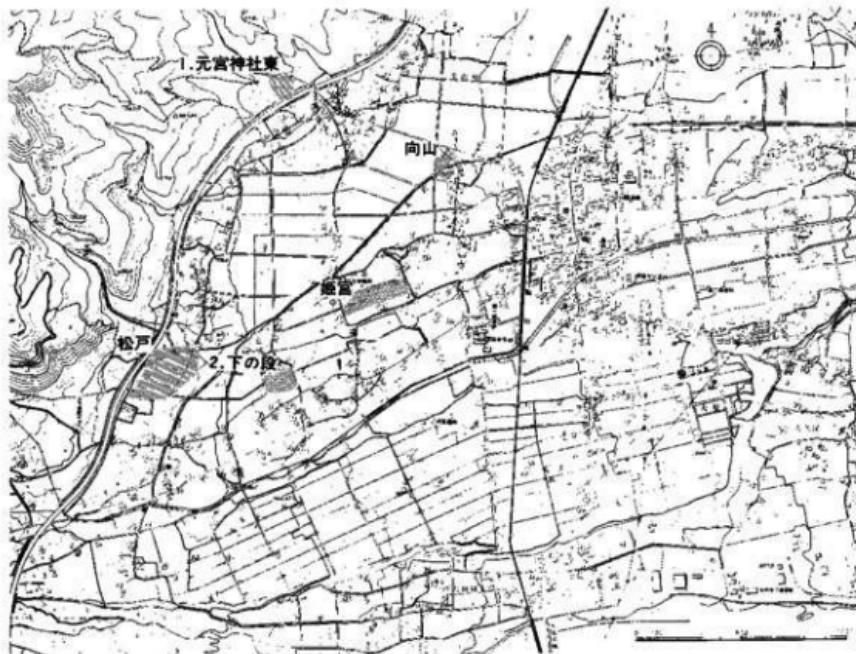


図3 縄文時代早期の遺跡分布

1. 元宮神社遺跡 長坂扇状地の南端、宮ノ沢扇状地に接した位置にある。昭和45年中央道関連遺跡として調査された。ここでは早期の住居址が4軒と、ピット群が確認され、早期末の遺跡として諸問題を提示している。
2. 下の段遺跡 昭和51年県営圃場整備事業によって発掘調査が行なわれた。条痕文系土器を中心とした早期末の土器片が多数出土している。在地豪族小田切氏との関連性をうかがわせる鎌倉期・室町期の陶器破片が発見された。

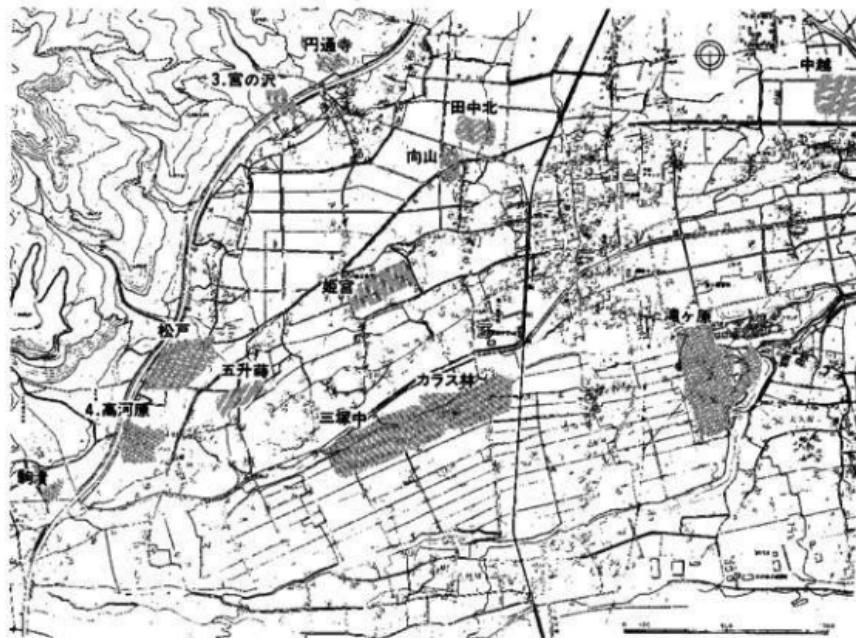


図4 繩文時代中期の遺跡分布

3. 宮の沢遺跡 宮ノ沢扇状地端に位置しており、遺物の散布状態からすると南の傾斜へのびる遺跡と思われる。昭和45年に中央道調査団によって調査された。縄文時代中期の住居址2軒、平安時代2軒が検出された。遺跡北側の猪土手も調査された。猪や鹿などの被害とたたかう近世の農民達の苦心がうかがえるものである。
4. 高河原遺跡 発見は昭和28年の水田造成工事の折である。縄文時代中期の住居址の一部が発見された。付近の分布調査を行なったところ、扇状地一帯に遺物が散布していることが確認される。やはり昭和45年中央道調査団によって調査された。縄文時代中期の住居址が3軒検出され、そのいずれもが、埋蔵を有している。



図5 古墳時代～中世の遺物を出土する遺跡分布

表1 宮田村内遺跡にみる陶磁器出土状況

番号	遺跡名	所在地	古墳時代		奈良・平安時代		中世		備考
			土師	須恵	土師	須恵	灰陶	陶器	
1	松戸遺跡	宮田村南割			○	○	○	○	○ 住居址（縄文中期5軒、平安1軒）
2	懸野寺本堂跡遺跡	宮田村南割			○	○	○	○	○ 寺院址・住居址
3	下の段遺跡	宮田村南割			○	○	○	○	○ 繩文早期土塙・小田切氏居館
4	五升寺遺跡	宮田村新田			○	○	○	○	○ 住居址（縄文中期2軒）
5	姫宮遺跡	宮田村南割	○	○	○	○	○	○	住居址（弥生19軒、平安1軒）
6	実庵遺跡	宮田村南割	○	○	○	○	○	○	住居址（弥生9軒、平安1軒）
7	駒ヶ原南遺跡	宮田村大久保	○	○			○	○	住居址（縄文前期6軒、苏生3軒）
8	駒ヶ原下遺跡	宮田村町	○	○	○	○	○	○	住居址（縄文前期3軒）
9	カラス林遺跡	宮田村南割							住居址（縄文中期5軒）
10	三ツ塚遺跡	宮田村南割	○	○	○	○	○	○	住居址（縄文中期9軒）
11	三ツ塚古墳	宮田村南割	○	○					
12	中越遺跡	宮田村中越			○	○	○	○	

13	田中北遺跡	宮田村北割		○	○	○	○	○	○	○	○		
14	古町遺跡	宮田村北割	○	○	○	○	○	○	○	○	○	住居址（室町1軒）	
15	広垣外遺跡	宮田村北割	○		○	○	○	○	○	○	○	住居址（平安5軒）	
16	駅道堂遺跡	宮田村北割			○		○	○	○	○	○		
17	宮ノ沢遺跡	宮田村北割			○		○	○	○			住居址（繩文2軒、平安2軒）	
18	元宮神社東遺跡	宮田村北割			○		○	○				住居址（繩文早期3軒）	
19	大白古墳	宮田村北割	○	○								円墳・横穴石室	
20	円通寺遺跡	宮田村北割			○		○					住居址2軒	
21	真米遺跡	宮田村北割					○						
22	上の宮遺跡	宮田村新田						○					
23	田中東遺跡	宮田村南割	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
24	田中南遺跡	宮田村南割			○	○	○	○	○	○	○	住居址（平安1軒）	
25	田中西遺跡	宮田村南割	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
26	向山遺跡	宮田村南割			○	○	○	○					

第二章 調査の経過

第一節 調査に至るまで

昭和45年にたてられた宮田村総合開発計画による県営圃場整備事業の実施される中で、埋蔵文化財の発掘調査も田中北・古町・広垣外・木戸口・姫宮・向山各遺跡がすでに終了した。当該松戸遺跡は、本年度事業の関係として、下の段・五升蔵・駒渕遺跡などとともに発掘調査が行なわれた。

松戸遺跡は、昭和28年埋蔵文化財分布調査の折発見された遺跡であり、その後水路改修工事、水道工事、表採をとおして、須恵器・土師器のほかに中世の陶器片が多く確認された。

今回県営圃場整備事業により破壊される運命に至ったが、文化庁、県文化課、南信土地改良事務所の御指導・御協力をいただき、昭和51年10月29日記録保存処置による発掘調査にふみきった次第である。

(太田照夫)

第2節 調査の組織

松戸遺跡発掘調査団

団長 友野 良一 日本考古学会会員
 調査員 小木曾 清 宮田村考古友の会会員
 丸山 やよい 上伊那考古学会会員
 飯塚 政美 長野県考古学会会員
 気賀沢 進 長野県考古学会会員
 伊藤 修 飯島町教育委員会
 赤羽 義洋 国学院大学学生

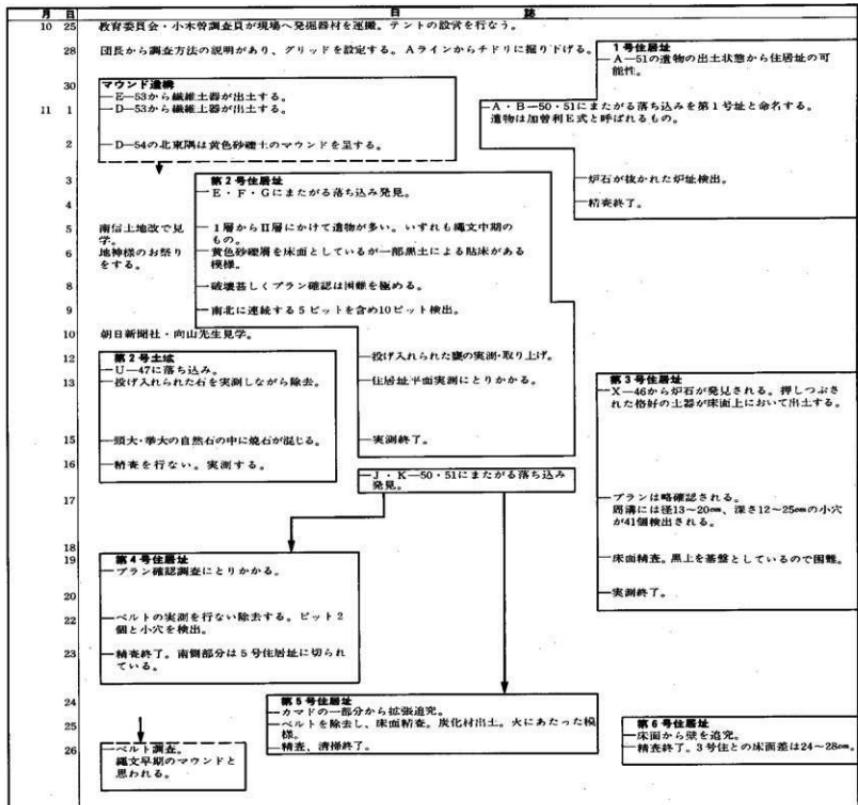
調査事務局

事務局長 林 金茂
 次長 太田 黒夫
 古河原 正治
 吉沢 まさ子

発掘協力者

春日松巳 春日修一 太田利雄
 北沢武男 小林喜男 小田切英夫
 春日宗木 下進 富木芳弥
 保科義重 桃沢乙平 中島定治郎
 田中計主 平沢 茂 芦部政市
 小林広子 水野愛子 平沢八千子
 平沢邦子 市瀬玉枝 白鳥あき子
 小田切文子 向山まさ子

第3節 調査の経過



第III章 調査の結果

第1節 遺跡の概要

今回の調査区域は、松戸遺跡（宮田村教育委員会作成の宮田村遺跡分布図による）の南側部分にあたり、東西54m、南北52mの2808m²にわたる。加藤宅の鶴小屋の西の田の東南隅を基点とし、南北A・B・C…、東西46・47・48…とグリッドを設定した。

調査の結果、遺構は、縄文時代早期の落ち込みを伴うマウンド1基、縄文中期の住居址5軒、土塙が2基、平安時代の住居址1軒が確認された。いずれも調査区域南側部分に位置することから、これらの集落は、北東方向へのびるものと思われる。

遺物は、縄文時代早期の柏煙式土器から始まり、住居址の出土した中期の土器が多数出土し、平安時代の土師器・陶器片、そして鎌倉時代の陶器破片がある。陶器は、A-H・62~70グリッドに集中して出土し、遺構出土を期するところであったが、暗渠施設等に破壊されており、確認することはできなかった。

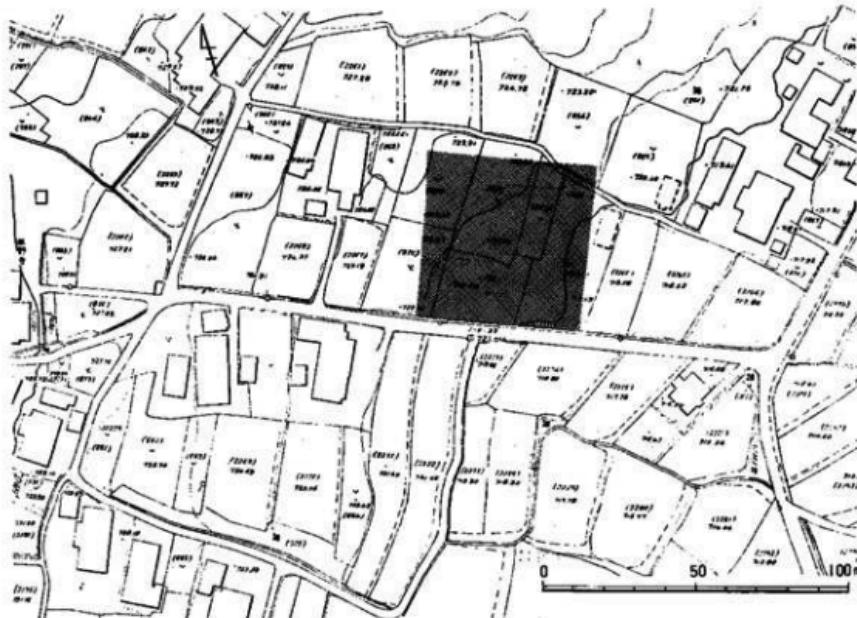


図6 グリッドの設定

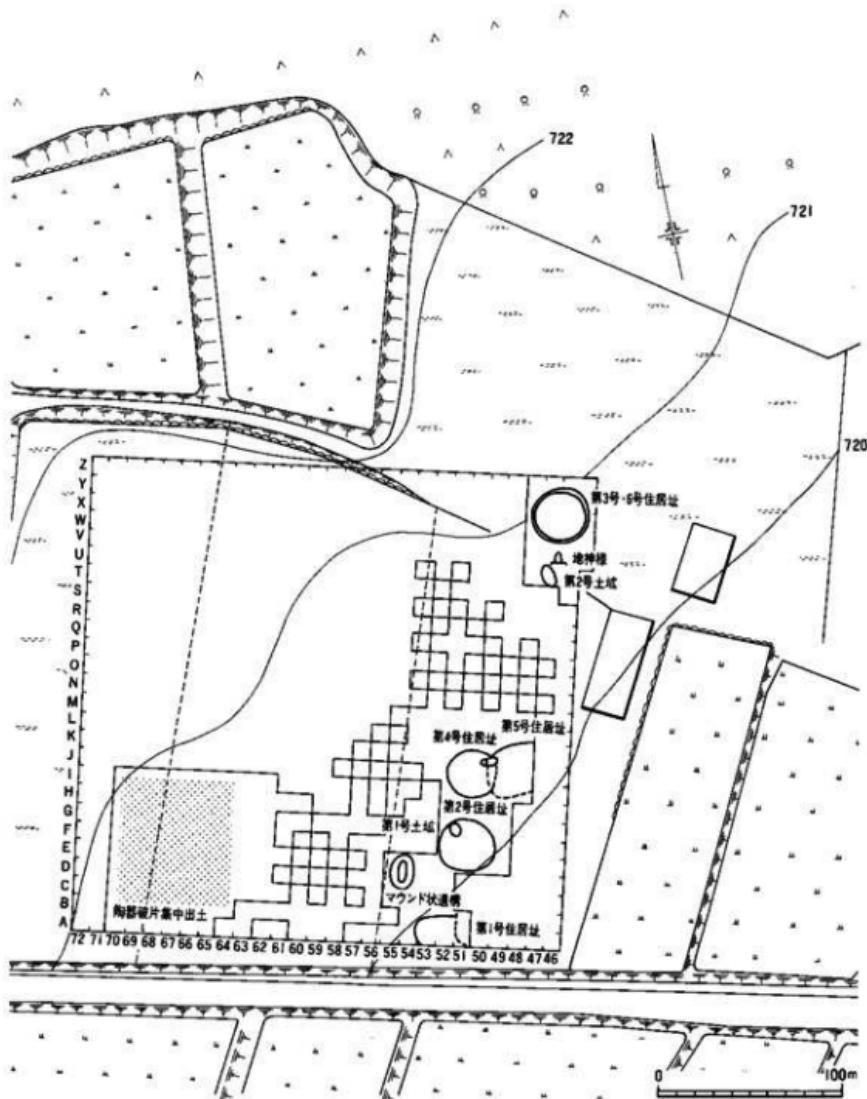


図7 遺構の概略 (1:1200)

第2節 繩文時代の造構と遺物

落ち込みを伴うマウンド (図8, 9, 10、表1、図版3.4)

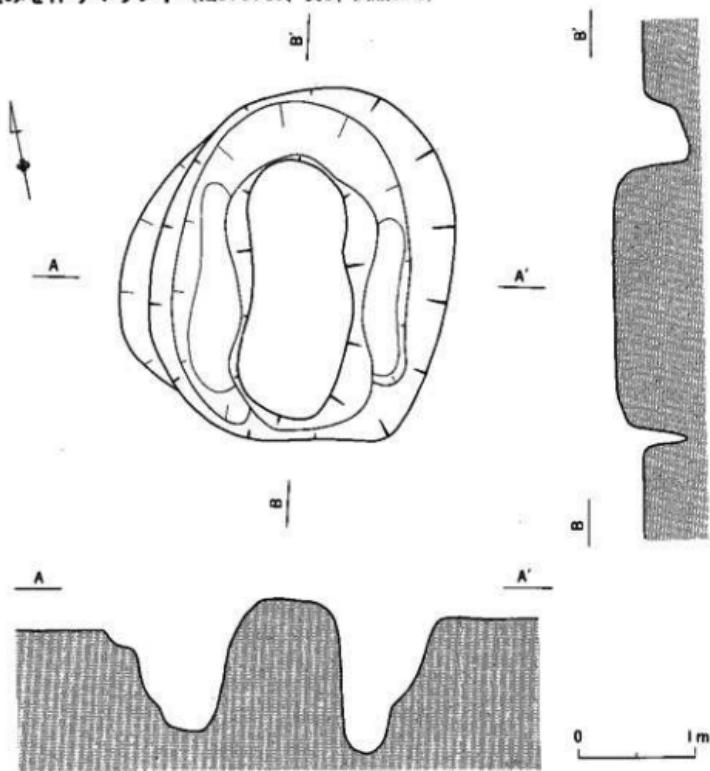


図8 落ち込みを伴うマウンド (1:60)

表2 粗粒式土器片の肉眼観察

図	図版	器面観察状況
10-1	3-1	口縁部破片で、口唇上に刻目があり、その直下の表裏に爪形文が施されている。表面の爪形文から下部は繊維状のもので横方向になでて仕上げがなされ、裏面は貝殻を同じく横方向に仕上げている。胎土中には纖維・石英・長石・雲母が含まれている。
10-2	3-2	波状口縁の頂部の破片で、頂上部分はやや幅広で平らになっており、その部分を含めて口唇上には刻目が施されている。表裏とも爪形文が連続して横方向につけられており、表面は繊維状のもので、裏面は貝殻によって横方向になでて仕上げられている。胎土中には纖維・石英・長石、それに細かな雲母が含まれる。
10-3	3-3	口縁部の破片で、口唇上には刻目があり、その直下の表裏には爪形文が連続して横走する。表裏とも繊維状のものによる横方向のなでによって仕上げられている。胎土中には纖維・石英・長石、細かな雲母が含まれる。
10-4	3-4	口縁部の破片で、口唇上に刻目があり、口唇直下の表裏に爪形文が横走する。表・裏面とも、貝殻あるいは繊維状のものによって仕上げてある。胎土中には、纖維・長石・石英・細かな雲母が含まれている。

10-5	3-5	口唇直下の口縁部破片で、表面に爪形文が横走する。表面は繊維状のものにより、裏面は貝殻による擦方向のなでによって仕上げてある。胎土中には纖維・長石・石英・細かな雲母が含まれる。
10-6	3-6	口縁部破片で、口唇上に刻目があり、口唇直下の表裏に爪形文が施され、表面では上段の爪形文の下部5mmのところにももう一列連続爪形文が横走している。表裏面とも、貝殻とも纖維ともつかぬものでなでて仕上げてある。纖維・石英・長石が胎土に含まれており、雲母は細かなものが混入している。
10-7	4-1	口縁部付近の破片で、連続爪形文が横走している。表裏面ともなで痕は顕著でなく、裏面には成形時の指痕が残っている。胎土中には纖維・石英・長石・細かな雲母が含まれている。
10-8	4-2	脣部の破片で、表面の一部と裏面に貝殻による器面調整が加えられており、表面は、貝殻条痕の上を更に、纖維状のものによってなでが行なわれている。
10-9	4-3	脣部破片で、口縁上に近いところに連続爪形文が横走する。纖維質のものによって表面の一部に擦及びなめ方向に転がし器面調整がされている。裏面は指痕が顕著である。胎土中には多量の纖維のほか、やや大粒の石英・長石と細かな雲母が含まれている。
10-10	4-4	脣部破片で、表裏面とも擦及びなめ方向に貝殻による器面調整がなされている。裏面には大きな指痕が残されている。胎土には、石英・長石及び細かな雲母が含まれている。
10-11	4-5	脣部破片で、表面にはやや幅広な貝殻条痕が残されている。裏面には一部に転がし痕があるが、成形時の指痕が顕著である。胎土中にはやや大粒の石英・長石及び細かな雲母・纖維が含まれている。

以上の肉眼による土器片の器面観察に基けば、これらの土器片は粕烟式土器と呼ばれるものであることは明らかである。これらの土器片は、全体として、貝殻条痕はさほど顕著ではなく、纖維質のものによる擦痕（なで）がかなり多い。また、器面調整せずに成形時の指痕をそのまま残す破片も多い。貝殻条痕や纖維痕（なで）は、口縁部付近では表裏面とも横走するものが多く、脣部では多くの破片で縱方向あるいはなめ方向に施される。纖維は多量に包含されており、長く糸状になつたものが殆どで、ワラをきさんだような纖維は含まれていない。厚さは6~8mmである。

なお、ローム・マウンド付近から出土したこれらの土器片は、色調その他から、およそ2~3個体分のものと思われ、従って表1で記述した特徴が必ずしも個体差になるというわけではない。



図9 落込みを伴うマウンド

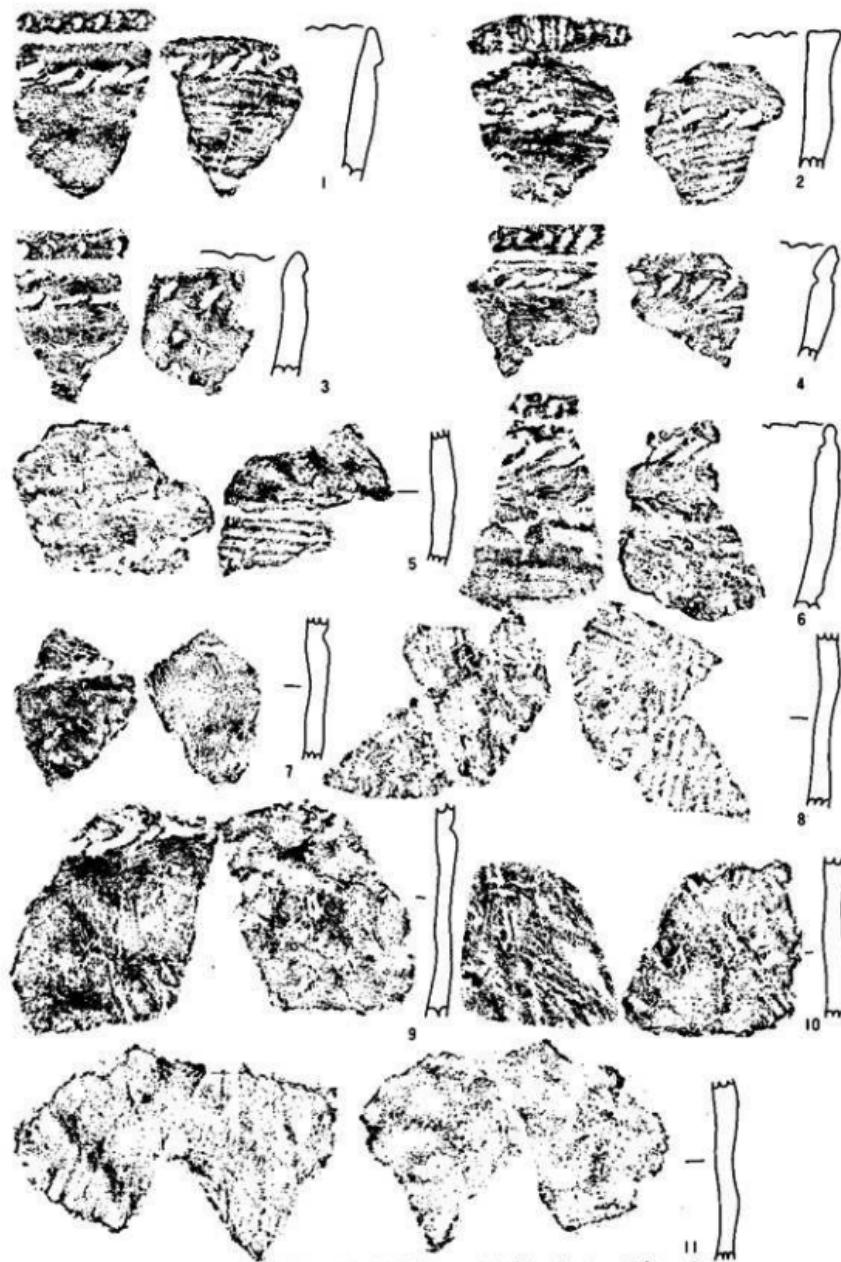


図10 桶文時代早期の土器拓影(右・表、左・裏)(1:2)

第1号住居址 (図11. 12. 13、表3.4、図版5)

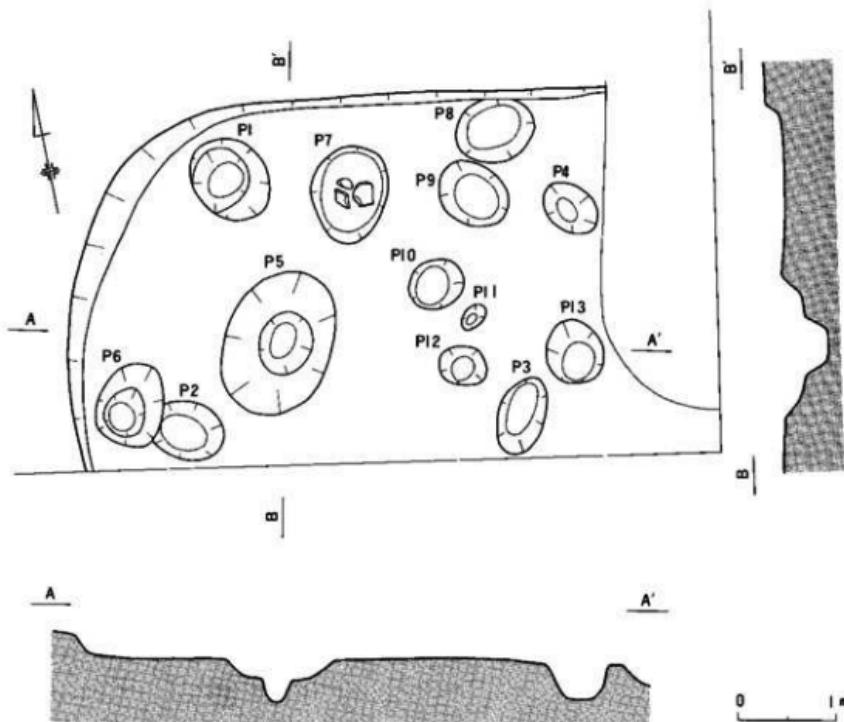


図11 第1号住居址 (1:60)

A-51グリッドを中心として遺物が多量に出土し調査当初から落ち込みが確認されていたが、残存状態が悪くプランの全貌を明らかにすることはできなかった。炉として使用されたと思われるピットが検出され住居址となつたが、困難を極める調査であった。

- a. 位置 調査区南端、A-B-50-51-52グリッドにまたがる。東側部分は、東へ延びる落ち込み（性格不明）と切り合つてゐる。
- b. プラン 不明。($3.5\text{m} \times 5.5\text{m}$)
- c. 壁 南壁・東壁は確認できなかつた。壁高15~20cm。
- d. 周溝なし。
- e. 床面 黄色砂礫層を基盤としており、堅緻でない。僅かに東へ傾斜している。
- f. 炉址 中央部西寄りのP₅が使用されたと思われる。縁石が抜かれている。
- g. ピット(表2) 主柱穴としてP₁・P₂・P₃・P₄を使用したものと思われる。いずれも橢円形プランを呈し、長径70~80cm、深さ55~6cmを測り、掘り方の大きなものである。

i. 遺物 A-51グリッドを掘り下げる段階で多量に出土した土器は、住居址の覆土に包含されていたものと考えられる。完掘していないので、他の住居址にくらべ量的に少ない。出土した土器は、殆ど曾利式・加曾利E式と呼ばれる時期のものである。図12-1は高さ22cmほどと思われる小形の深鉢形土器で、胴部には沈線で、いわゆる「ハ」の字状の施文がなされている。出土した土器片は、全体として、胴部に満巻文状の文様が微降起帯や沈線で施されているもの(図13-10~17)と、沈線のみによって縱割りの区画が行なわれるもの(図13-5・6・7)とがあり、前者は主として幅の広い沈線や繩文によって間隙がうめられ、後者は繩文や細い沈線によってうめられる。また、波状の沈線が垂下するのも後者の特徴である。一方、図13-1、図版5-1・2のような、加曾利E式に類似する破片や、図13-4、図版5-9のような、東海方面に主として分布するものに類似してゐるものもある。石器は、打製の石斧1点と剥片石器で、量的に非常に少ない。

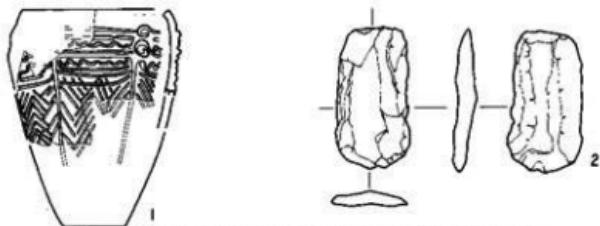


図12 第1号住居址出土の遺物(土器1:6、石器1:3)

表3. 第1号住居址内のビット

ビットNo.	平面形	規 模(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	平面形	規 模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	90×74	44	8	楕円形	68×80	14
2	楕円形	58×76	51	9	楕円形	76×62	52
3	楕円形	80×48	19	10	円形	56×54	36
4	楕円形	62×46	20	11	楕円形	30×20	6
5	楕円形	150×108	40	12	方形	44×48	23
6	楕円形	84×66	54	13	楕円形	80×48	34
7	楕円形	98×76	43				

表4. 第1号住居址出土の石器

番号	図番号	器種	長(m)	巾(m)	厚(m)	重(g)	石質	完破	番号	図番号	器種	長(m)	巾(m)	厚(m)	重(g)	石質	完破
1	図12-2	打製石斧	73	35	9	52	硬砂岩	完	7		剥片石器	22	10	4		黒曜石	
2		剥片石器	62	18	12	140	頁岩	完	8		剥片石器	33	22	3		黒曜石	
3		剥片石器	28	16	4	140	黒曜石		9		剥片石器	27	21	10		黒曜石	
4		剥片石器	18	24	3	20	黒曜石		10		剥片石器	47	14	9		黒曜石	
5		剥片石器	38	25	12	10	黒曜石		11		剥片石器	29	23	7		黒曜石	
6		剥片石器	26	20	10		黒曜石										

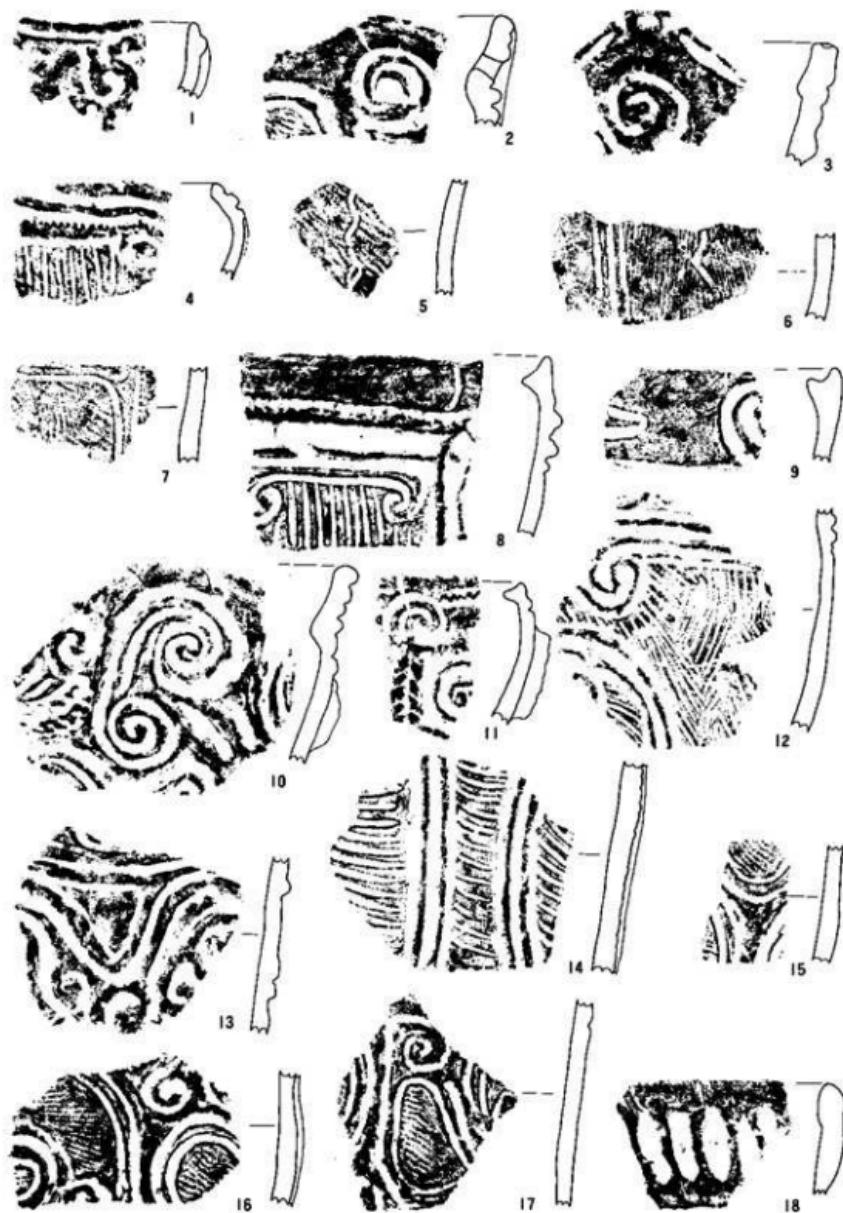


図13 第1号住居址出土の土器拓影 (1:3)

第2号住居址 (図14~18、表5.6、図版6.7.8)

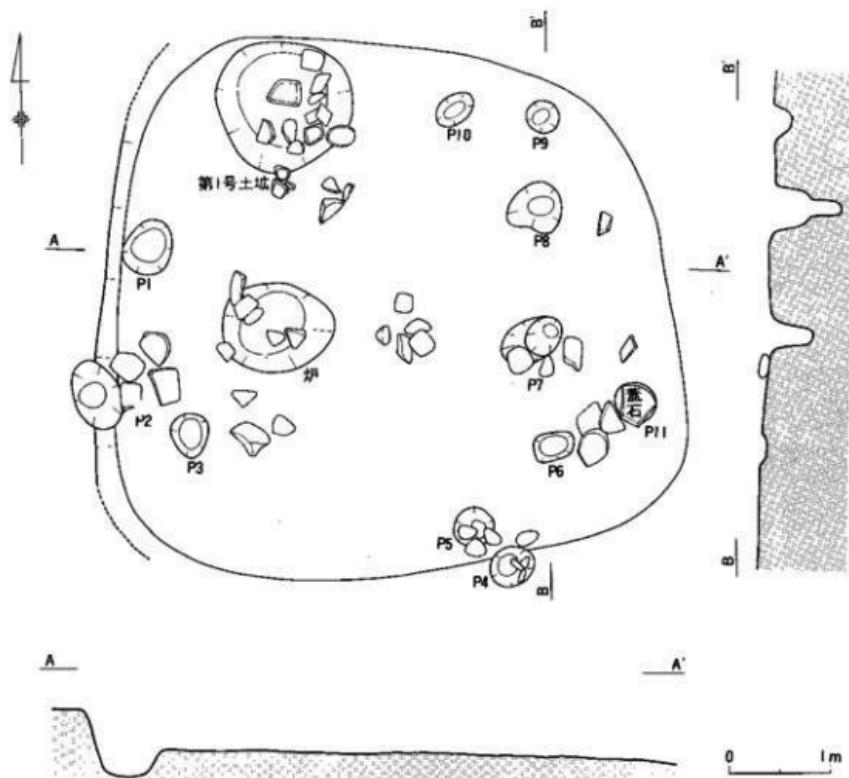


図14 第2号住居址 (1:60)

- a. 位 置 E・F・G-49・50・51・52グリット
- b. プラン 西壁一部が検出されたのみであるが、推定するに方形に近い橢円形を呈すると思われる。 $(5.7\text{ m} \times 5.3\text{ m})$
- c. 壁 壁高34cm。
- d. 周 溝 なし。
- e. 床 面 黄色砂礫層を基盤としているが、東側埋裏付近には黒色土の貼り床が施されていた。廃絶時以降の石の投げ入れがあり、頭大の自然石が露出していた。投げ入れた方向は南側。第1号土塙も同じ状況であった。
- f. 炉 址 中央部西寄りに偏在。炉縁石が抜かれている。
- g. ピット 北壁に接して竪穴内に検出された落ち込みは、径1.2m、深さ0.9mという規模の為、第1号

土塙とした。床面を切って掘り込まれており、土塙内からは住居址床面と同一個体の土器が出土したことから、本址に直属、使用されたものと思われる。貯藏穴としてであろうか。

h. 埋 蔽 南東隅より内側に50cmはいった位置に埋蔵が発見された。埋蔵よりやや小形の花崗岩で厚さ5cm程の自然石が蓋として置かれていた。穴は蓋石が床面と水平になる程の深さに掘り込まれ、5cmの厚さに砂の層を、その内側に5~7cmの厚さで黒色土を施し、甕の固定をはかつてあった。

i. 遺 物 床面・覆土を合わせ、出土した土器の量が多い。埋蔵に使われた土器(図15、図版6-1)は、曾利系のもので、縦割りした区画の中を「ハ」の字状文でうめている。口縁部・底部は失われている。全体として、区画内に沈線の施文が目立つ曾利系のもの(図16-2~5、図17)と、繩文施文による加曾利E系のもの(図16-1、図18-6・9・10・11)とがある。図16-6は、有脚の土器の脚部であろう。楕円形のすかしがあり、表面は、隆起状のものが剥落している。図16-7は土偶の足の破片である。石器は、覆土と床面出土が混在するも、打製石斧・乳棒状の石斧・横刃形石器という組成が見られる。(図版8、表4)なお、第1号土塙からは、乳棒状石斧の胸部破片(図版19-21)も出土している。



図15 第2号住居址出土の埋蔵土器

表5. 第2号住居址出土の石器

番号	図番号	器種	長 (mm)	巾 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	完破	番号	図番号	器種	長 (mm)	巾 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	完破
1	図16-10	打製石斧	105	45	15	120	硬砂岩	完	9		ドリル	25	24	6		黒曜石	
2		打製石斧	98	45	13	88	凝灰岩	破	10		砥石	90	75	55	660	緑色岩	完
3	図16-8	打製石斧	122	45	10	70	緑色岩	破	11		剥片石器	25	15	4		黒曜石	
4		打製石斧	102	42	11	80	安山岩	完	12		剥片石器	42	22	7		黒曜石	
5		打製石斧	65	54	18	110	フォルンフルス	?	13		剥片石器	28	18	3		黒曜石	
6	図16-9	敲打器	150	45	40	418	緑色岩	破	14		剥片石器	28	6	3		黒曜石	
7		磨製石斧	82	32	8	23	緑泥片岩	破	15		剥片石器	24	15	4		黒曜石	
8		スクレイバー	28	15	5		黒曜石		16		剥片石器	20	11	3		黒曜石	

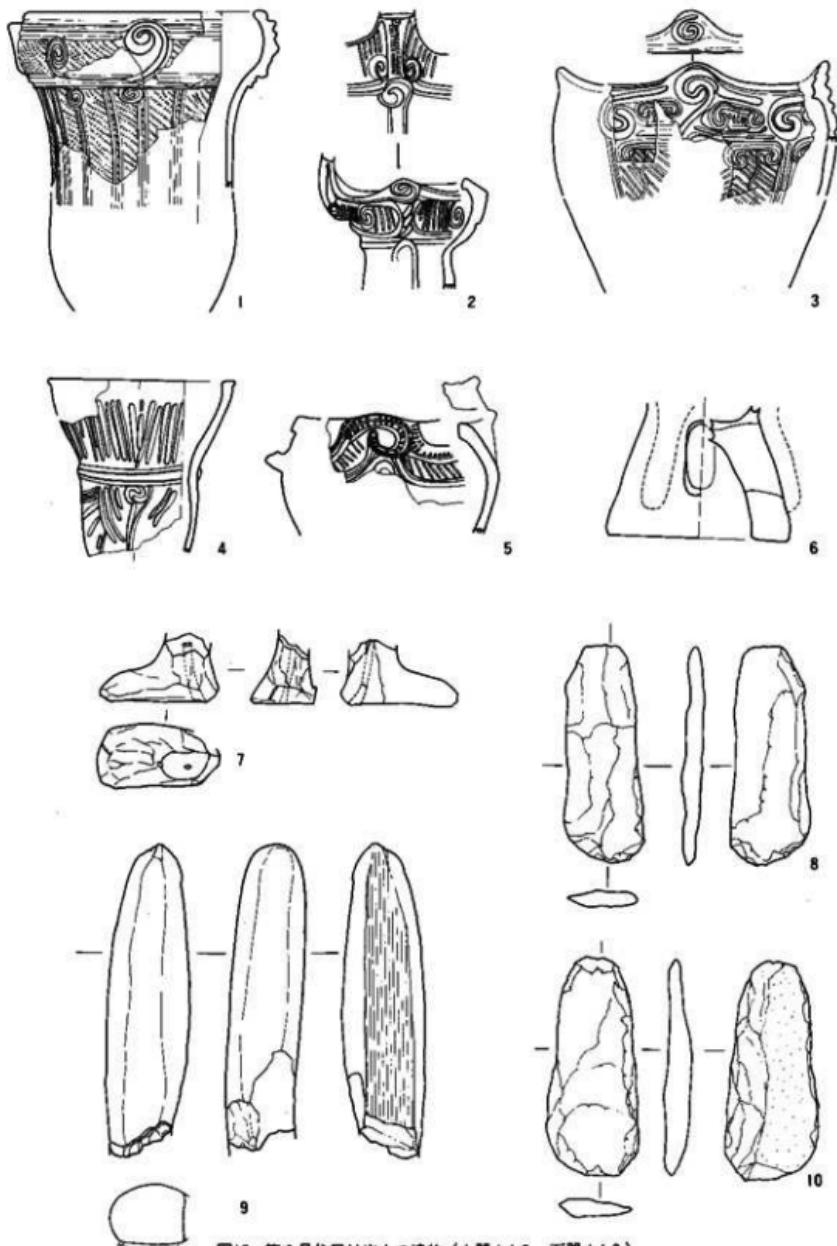


図16 第2号住居址出土の遺物（土器1：6 石器1：3）



図17 第2号住居址出土の土器拓影（1:3）

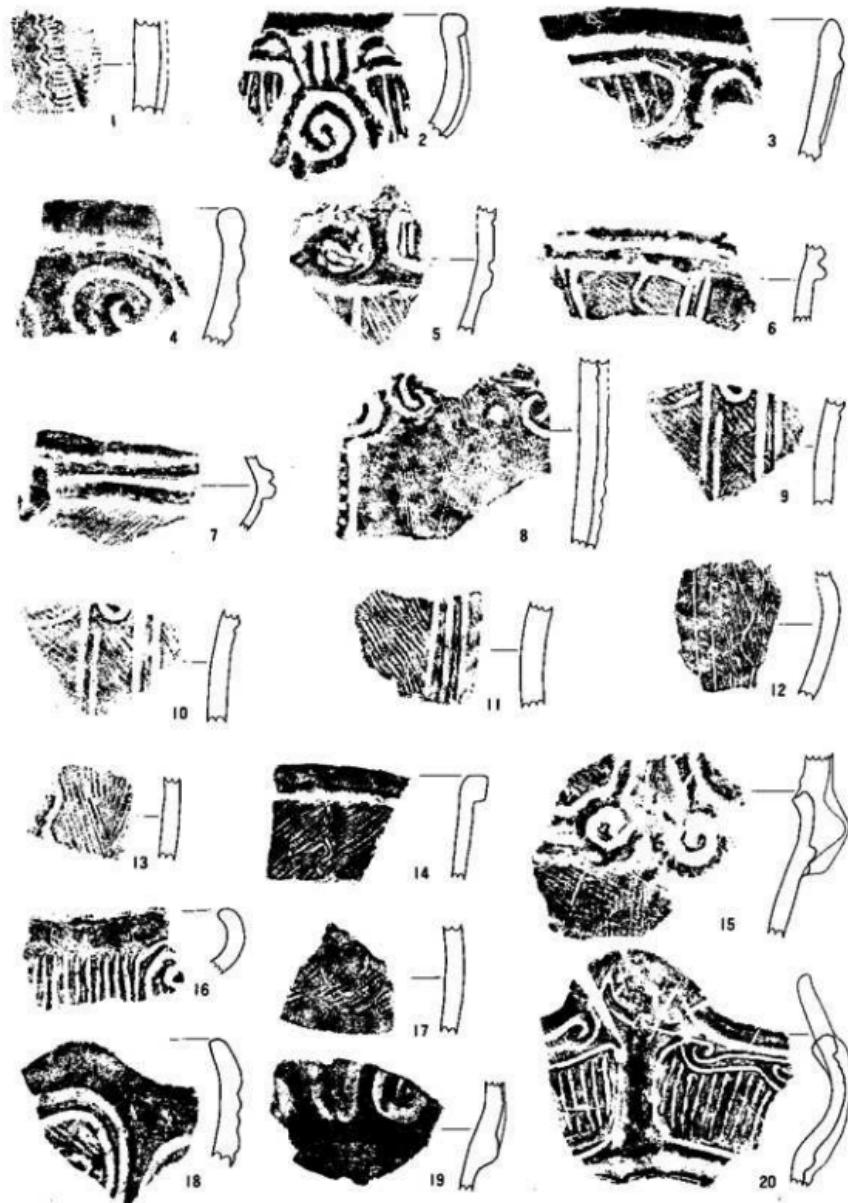


図18 第2号住居址出土の土器拓影（1:3）

表8. 第2号住居址内のピット

ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	34×48	39	7	楕円形	42×66	28
2	楕円形	70×46	64	8	楕円形	52×56	37
3	楕円形	48×38	39	9	円形	34×32	17
4	円形	40×44	33	10	楕円形	30×34	16
5	円形	38×40	24	11	円形	40×38	41
6	方形	28×42	4				

第3号住居址(図19~21、表7.8、図版13.14.15)

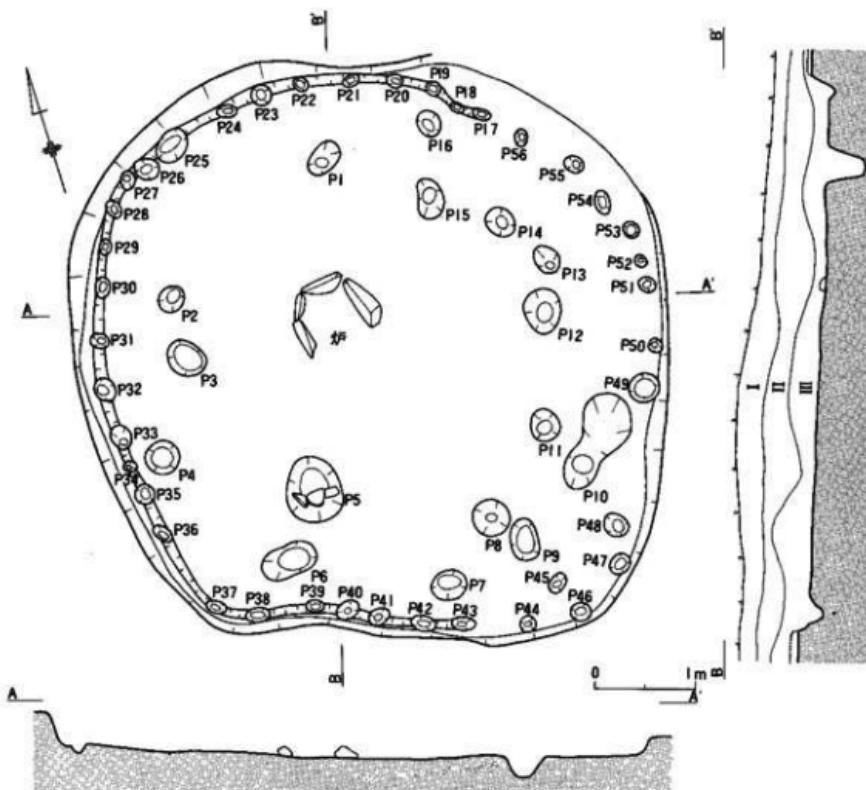


図19 第3号住居址(1:60)

- a. 位置 調査区東端、W・X・Y・Z—45・46・47・48グリッド
- b. プラン 円形。径5.8m。
- c. 高さ 高さ20~25cm。北東隅は確認不可能。
- d. 周溝 幅8~15cm、深さ10~18cm程の狭い周溝が、東側を除いた部分を巡っている。周溝内には27個の小穴が穿たれていた。いずれも径15~16cm、深さ10~20cmの小穴（表6）である。周溝の認められない東側部分にも同様の小穴が13個あることから、実際には周溝は全周していたものと考えられる。
- e. 床面 第6号住居址床面上24~28cmに黒色砂質土を貼りつけたもの。堅く踏み締められていた。
- f. 炉址 南側の縁石が抜き去られ、4個の自然石がコの字状に組まれている。竪穴内中央部西寄りで、第6号住居址の炉址ときれいに重なり合っている。
- g. 柱穴（表6）主柱穴としてどのビットが使用されたかは判然としない。 $P_2 \cdot P_5 \cdot P_{11} \cdot P_{15}$ とも、 $P_2 \cdot P_6 \cdot P_{11} \cdot P_{14}$ とも考えられる。
- h. 遺物 貼床下の第6号住居址の遺物と混在している可能性がある。図21—1~8は藤内、井戸尻各期の土器で、9~12は曾利期にかかるものである。図版14—3は口縁部文様帶と胴部文様帶とにはっきり分かれ、頸部は施文されていない。胴部は繩文地文に波状の沈線が垂下している。図21—14~16・17・18は同類のもので、19~21もそれに近い文様施文がなされている。25~27は、波状の隆帯が貼りつけられることで共通している。図20—1、図版14—1は、浅い条線が全面に施され、図20—2、図版14—2は深い沈線が引かれている。後者は、時期的にやや古い感じを与える。石器は、打製の石斧、横刃形の石器及び使用痕のある礫が出土しているが、乳棒状の石斧の出土はない。図版14—4は、使用痕のはっきり残っている礫で、同様のものは第2号住居址でも出土している。いずれも断面は角のとれた、三角形に近い形状をしている。

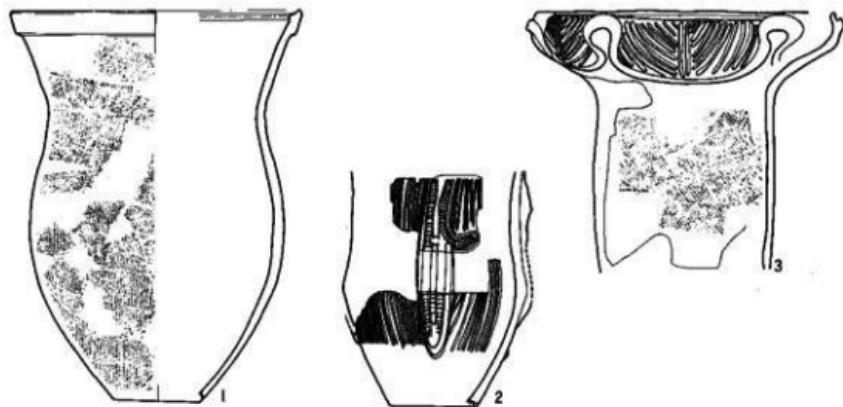


図20 第3号住居址出土の土器（1:6）

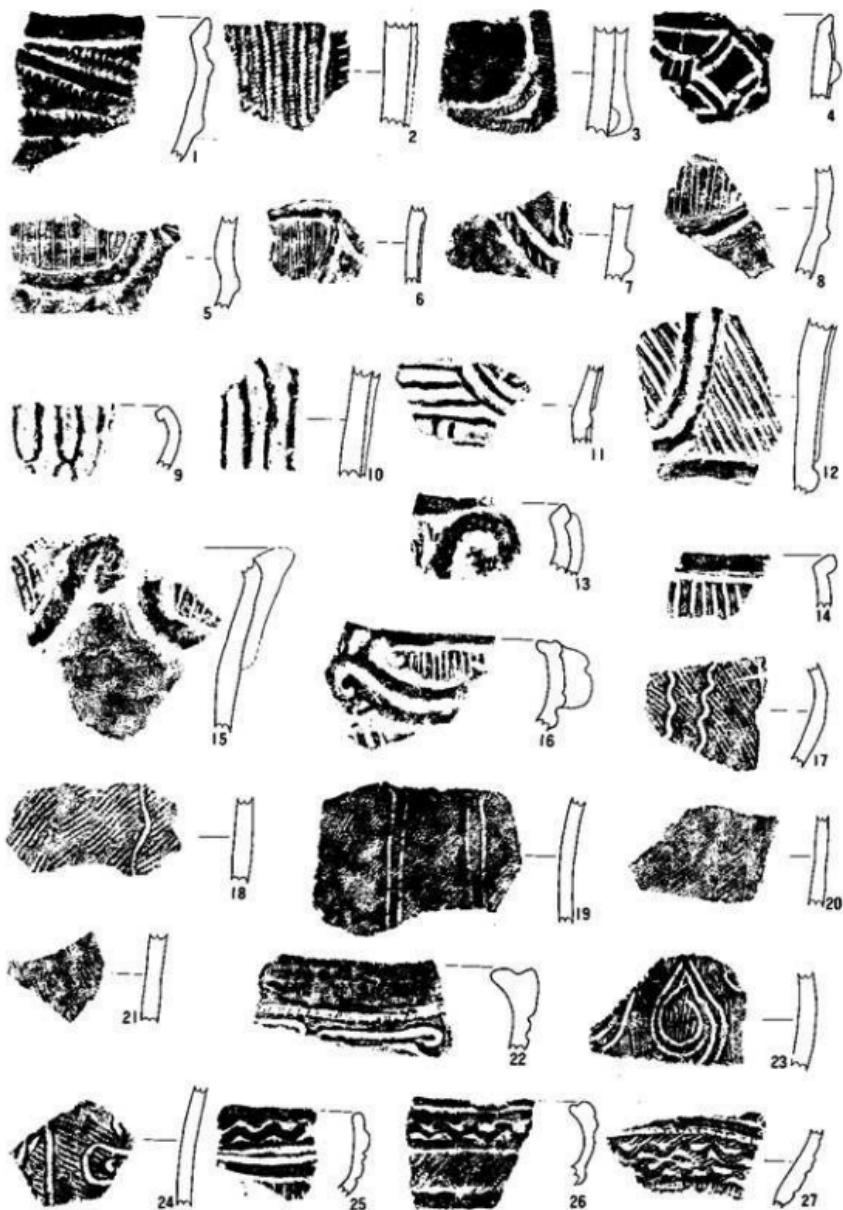


図21 第3号住居址出土の土器拓影（1:3）

表7. 第3号住居址内のピット

ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	38×28	48	29	楕円形	16×12	16
2	楕円形	28×26	42	30	楕円形	22×14	16
3	楕円形	40×36	32	31	楕円形	16×20	14
4	円形	34×34	39	32	楕円形	24×22	14
5	楕円形	66×56	41	33	楕円形	26×20	17
6	楕円形	34×56	45	34	楕円形	12×14	9
7	楕円形	30×36	36	35	円形	20×20	13
8	円形	38×38	18	36	楕円形	20×14	8
9	楕円形	42×28	50	37	楕円形	18×14	6
10	楕円形	102×42	33	38	楕円形	18×22	7
11	楕円形	32×30	38	39	楕円形	12×18	12
12	楕円形	46×38	37	40	楕円形	18×22	14
13	楕円形	30×24	29	41	楕円形	16×22	13
14	楕円形	28×32	40	42	楕円形	18×20	11
15	楕円形	42×28	29	43	楕円形	14×24	29
16	楕円形	28×26	16	44	円形	16×16	6
17	楕円形	12×18	18	45	楕円形	14×20	19
18	楕円形	10×14	15	46	円形	20×20	9
19	円形	14×16	12	47	楕円形	18×20	16
20	楕円形	14×18	19	48	楕円形	26×22	33
21	楕円形	14×16	7	49	円形	30×30	20
22	楕円形	14×16	15	50	円形	14×14	9
23	円形	22×20	16	51	楕円形	16×18	12
24	楕円形	12×20	27	52	楕円形	14×12	14
25	楕円形	36×30	8	53	楕円形	16×14	13
26	楕円形	22×24	14	54	楕円形	26×22	7
27	楕円形	18×14	6	55	楕円形	18×20	19
28	楕円形	18×16	11	56	楕円形	18×14	14

表8. 第3号住居址出土の石器

番号	区番号	器種	長 (mm)	巾 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	完破	番号	区番号	器種	長 (mm)	巾 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	完破
1		打製石斧	70	60	25	90	硬砂岩	破	4		磨製打石	90	20	18	60	綠泥岩	破
2		打製石斧	74	50	25	90	硬砂岩	破	5		磨製打石	91	28	21	92	安山岩	完
3		打製石斧	100	45	25	120	フォルンフルス	完									

第4号住居址(図22~26、表9、10、図版9~12)

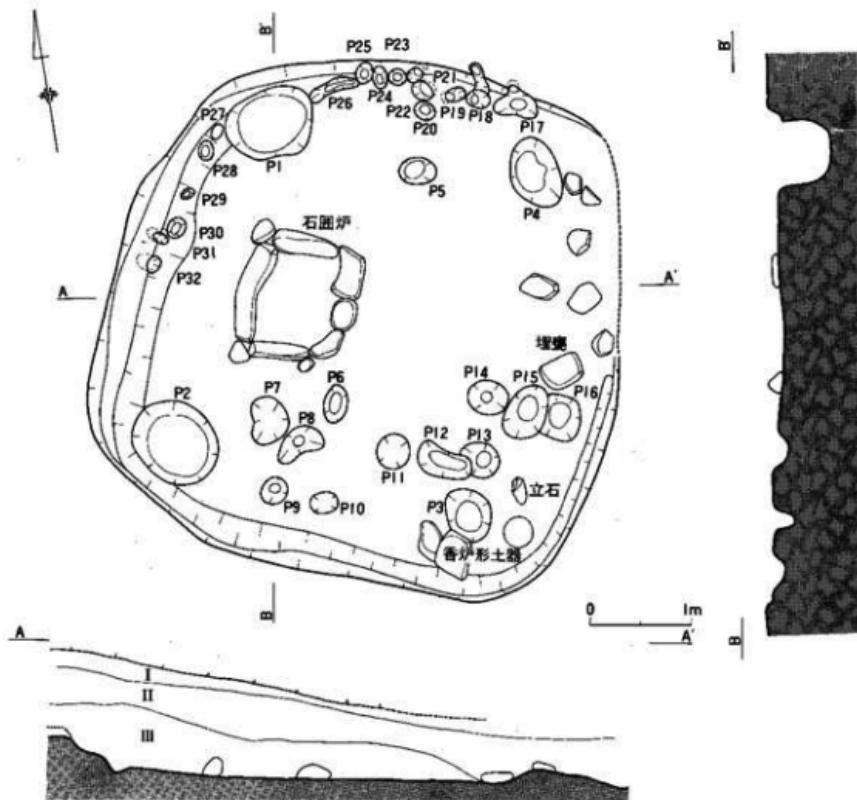


図22 第4号住居址(1:60)

- a. 位置 J・K-50・51・52。東側は第5号住居址と切り合っている。
- b. プラン 四隅が張った円形。5×4.9m
- c. 壁面 壁高6~14cm。
- d. 周溝 東側部分は第5号住居址により破壊されている。北側では明確な周溝が認められなかったが、小穴が連なっている。周溝は全周していたと思われる。
- e. 床面 黄色砂礫層を基盤とし、7~10cmの厚さに黒色土の置土をしたものである。
- f. 炉址 中央部西寄りに偏在する。南北120cm、東西110cmの方形石圓炉である。東側が炊き口なのか一段低くなっている。細長い変質花崗岩が使用されており炉址としては大形のもの。
- g. ピット(表8) 壁に接したコーナーに4個発見された。P₁・P₂・P₃・P₄とともに掘り方の大きなも

のである。

h. 埋 瓢 竪穴内東側で発見された。第2号住居址と同様、口縁部と底部を欠いた、長径38cm・厚0.7~1cmの深鉢形土器である。蓋石の厚さだけ深く掘り込まれ、埋甕の安定をはかってあった。それらの中間に位置に径7cm、高34cmの硬砂岩の立石がある。頭に僅かに北へ傾斜させていた。

i. 遺 物 第5号住居址と重複していたため、その覆土からも多くの遺物が出土した。土器は、微隆起帯と沈線を主体とするもの（図26-11~16・18・20、図版10-5・6・9~12）輪の広い沈線と繩文施文によるもの（図26-1~10、図版10-3・4・7・8）及び特徴的な口縁部により東海地方と関連が考えられるもの（図26-21、図版10-13~16）がある。埋甕（図23、図版9）は、胴上部に隆起帯と沈線による渦巻文がめぐり、下半部は隆起帯で縱区画をし、いわゆる「ハ」の字状の沈線でうめている。口縁部と底部は欠かれている。一方、住居址の南東コーナー付近からは、香炉形の土器（図24、図版10-1・2）が出土し、かたわらには立石と思われるものが見られた。香炉形土器の縁の上面と、吊手状の部分の側面は、先端が半截状になった施文具で押引状の刺突をくり返して沈線で文様が描かれている。スヌ状のものが付着したのか、全体として黒光りしている。石器は、打製石斧と横刃形石器を主体にし、それに敲打製の石斧が加わる。図版11-3~5は両端に打撲痕のある石器で、中越遺跡などの前期の遺跡で特徴的に出土しており、中期のものかどうか疑わしい。図版12-17・18はスヌが付いている。



図23 第4号住居址の埋甕に使われた土器 (1:6)



図24 第4号住居址の香炉形土器 (1:6)

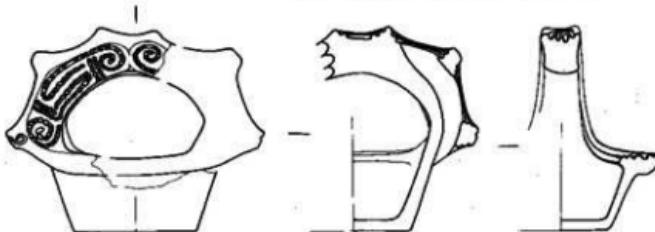


表9. 第4号住居址出土の石器

番号	図番号	器種	長(m)	巾(m)	厚(m)	重(g)	石質	完破	番号	図番号	器種	長(m)	巾(m)	厚(m)	重(g)	石質	完破
1	図25-2	打製石斧	96	44	15	110	綠色岩	完	10	図25-7	磨製石斧	97	79	40	430	安山岩	完
2	図25-1	打製石斧	116	44	32	250	綠色岩	完	11		磨製石斧?	123	58	36	375	粘板岩	完
3	図25-3	打製石斧	117	46	18	150	硬砂岩	破	12		磨製敲打器	92	30	21	100	安山岩	完
4		打製石斧	64	38	10	30	綠泥片岩	破	13		磨製敲打器	64	28	20	60	硬砂岩	完
5	図25-4	打製石斧	104	32	18	72	綠泥岩	破	14		磨製敲打器	75	37	22	100	硬砂岩	完
6	図25-6	打製石斧	95	42	16	100	?		15		磨製敲打器	92	30	21	100	安山岩	完
7		打製石斧	71	36	11	50	安山岩		16		敲打器	85	66	53	40	硬砂岩	完
8	図25-8	打製石斧	63	38	16	55	粘板岩	破	17		剥片石器	89	58	16	120	硬砂岩	
9	図25-5	磨製石斧	110	100	49	925	黑雲母岩	完									

表10. 第4号住居址内のビット

ビットNo	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	ビットNo	平面形	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	80×86	41	17	楕円形	40×44	21
2	楕円形	80×90	68	18	楕円形	18×24	4
3	楕円形	54×44	54	19	楕円形	14×20	24
4	楕円形	72×48	48	20	楕円形	22×18	15
5	楕円形	28×38	37	21	楕円形	22×20	20
6	楕円形	38×24	7	22	円形	14×14	25
7	楕円形	48×24	10	23	円形	16×18	4
8	楕円形	48×38	7	24	楕円形	24×14	12
9	円形	26×26	19	25	楕円形	22×16	15
10	楕円形	22×28	7	26	楕円形	12×50	14
11	円形	34×34	7	27	楕円形	16×12	15
12	楕円形	44×36	12	28	楕円形	18×14	26
13	楕円形	38×40	15	29	楕円形	10×12	19
14	楕円形	36×40	15	30	楕円形	20×18	24
15	楕円形	50×40	44	31	楕円形	10×16	37
16	方形容	50×42	36	32	楕円形	16×12	37

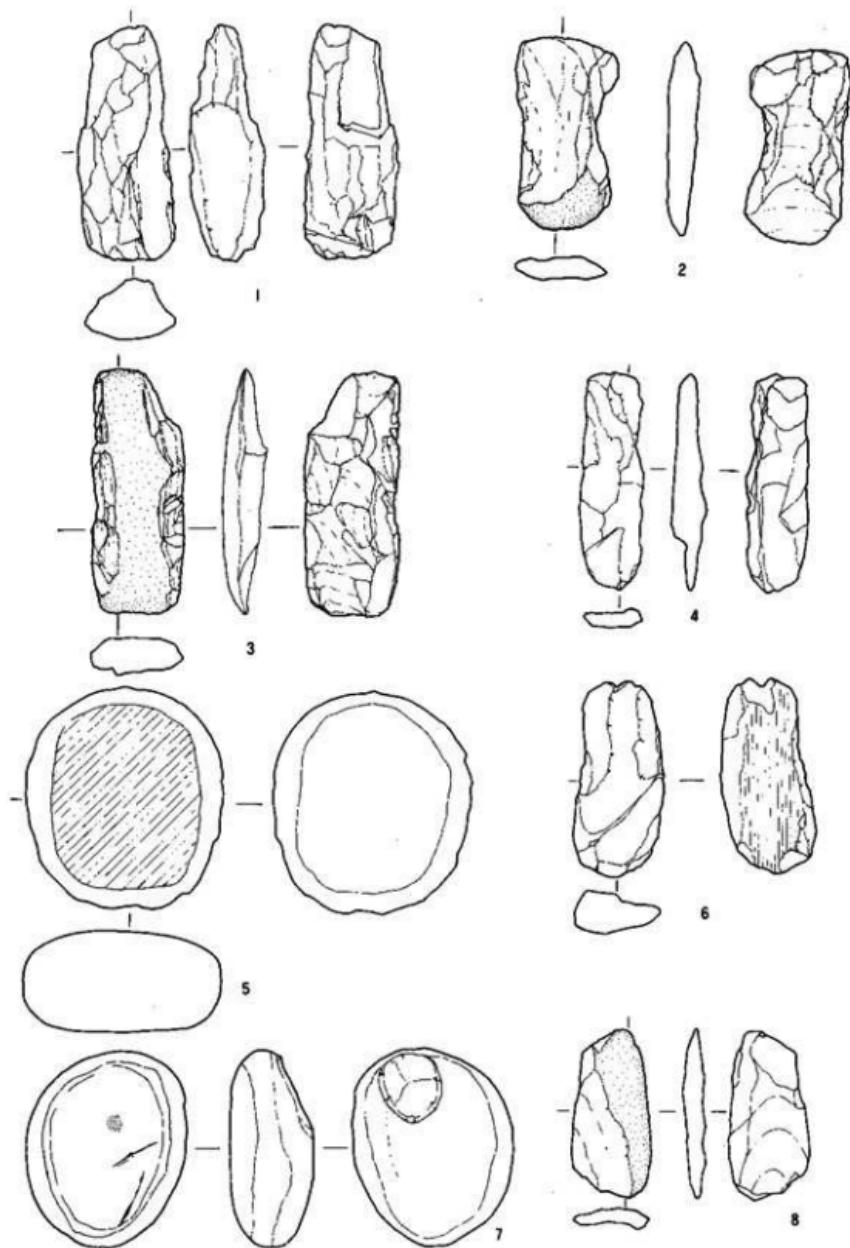
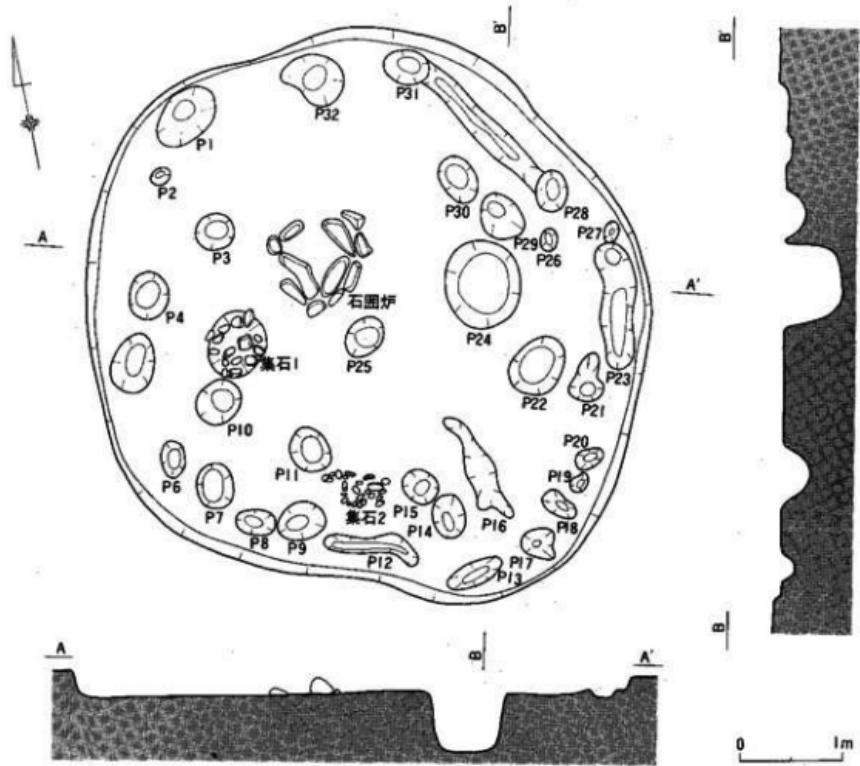


図25 第4号住居址出土の石器 (1:3)



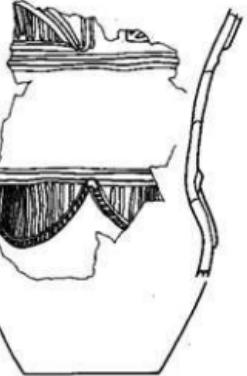
図26 第4号住居址出土の土器拓影（1：3）

第6号住居址(図27、28、29、表11、12、図版16、17)



▲図27 第6号住居址(1:60)

- a. 位置 W・X・Y・Z-45・46・47・48。第3号住居址の直下にあたる。
- b. プラン 円形。5.4m×5.5m。第3号住居址より径が0.3~0.4m 小さい。
- c. 壁高 西で30cm、東では10cm。
- d. 周溝 なし。
- e. 床面 黄色砂砾層のため凹凸があり、生活場面としてはあまり良好とはいえない。
- f. 炉址 第3号住居址の炉址直下。二重に石組した石囲炉。



▲図28
第6号住居址出土の土器(1:6)

g. 柱穴(表10) 主柱穴は4本なのか6本なのか判然としない。4本柱とするとP₄・P₁₁・P₂₄・P₃₂が、6本柱とするとP₁・P₄・P₁₁・P₂₂・P₂₉・P₃₁が主柱穴と考えられる。

h. 遺物 第3号住居址の床下で、遺物の出土量は少なかった。土器は主として井戸尻式のものである。図版17-2~7は胴下半部にいわゆる椭形文があり、典型的な井戸尻式である。椭形文をもつものの中でも、比較的大形の深鉢(図版17-2~4)とやや小形の深鉢(図版17-5~7)がある。図版17-1.18は浅鉢の口縁部破片で、8はやや厚手の土器である。19は從来から、いわゆる平出III Aと呼ばれてきている一連の土器のひとつである。図版17.9~17は、主として降起帯による文様を施したもので、井戸尻式期末期~曾利式期初頭のものが含まれると考えられる。しかし、いわゆる椭形文のある土器との時期的な前後関係については断言できない。石器の出土は少なかった。

表11. 第6号住居址内のピット

ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	50×62	44	17	楕円形	36×32	14
2	楕円形	16×20	9	18	楕円形	28×36	13
3	円形	36×38	29	19	楕円形	22×16	15
4	楕円形	46×38	24	20	楕円形	20×26	16
5	楕円形	60×42	23	21	楕円形	46×32	34
6	楕円形	36×24	10	22	楕円形	56×50	24
7	楕円形	44×36	31	23	楕円形	124×32	11
8	楕円形	26×40	18	24	楕円形	86×74	53
9	楕円形	38×48	25	25	楕円形	34×36	11
10	楕円形	44×46	17	26	楕円形	22×16	12
11	楕円形	46×38	25	27	楕円形	20×14	17
12	楕円形	16×94	6	28	楕円形	40×30	38
13	楕円形	24×58	8	29	楕円形	46×44	16
14	楕円形	42×32	14	30	楕円形	48×38	17
15	方形	36×36	13	31	楕円形	36×44	26
16	楕円形	116×30	21	32	楕円形	54×62	23

表12. 第6号住居址出土の石器

番号	図番号	器種	長(㎝)	巾(㎝)	厚(㎝)	重(g)	石質	完破	番号	図番号	器種	長(㎝)	巾(㎝)	厚(㎝)	重(g)	石質	完破
1		磨製石器	65	28	14	50	綠色岩	破	3		磨製石斧	92	30	8	30	綠泥片岩	破
2		磨製石器	64	42	35	30	綠色岩	破									



図29 第6号住居址出土の土器拓影 (1:3)

第2号土塙 (図30、図版16)

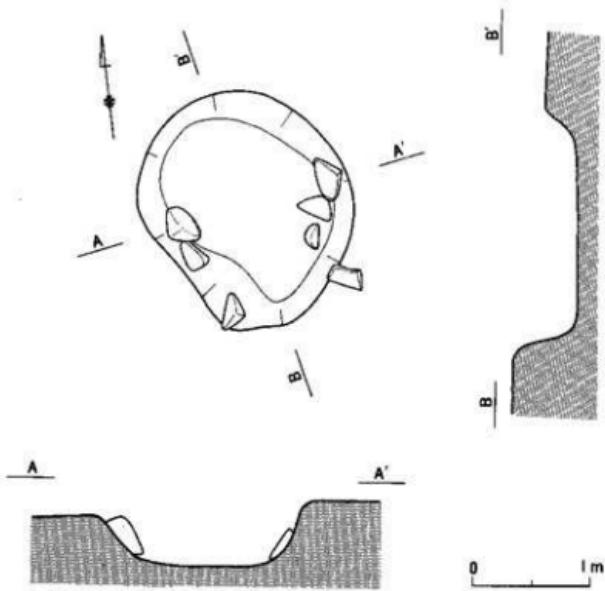


図30 第2号土塙 (1:60)

地神様の南側、U-47に位置し、径1.6mの円形プランを呈する。黄色砂礫層を基盤とし、断面
堀り鉢状に掘り込んである。土塙内には投げ込まれたらしい拳大~頭大の自然石が、充満していた。
石の上面が西高東底になっていることから、西の方向からの投石と思われる。縄文中期末葉に比定
される土器片を作出している。

第3節 平安時代の造構と遺物

第5号住居址（図31～33、表13.14、図版21～23）

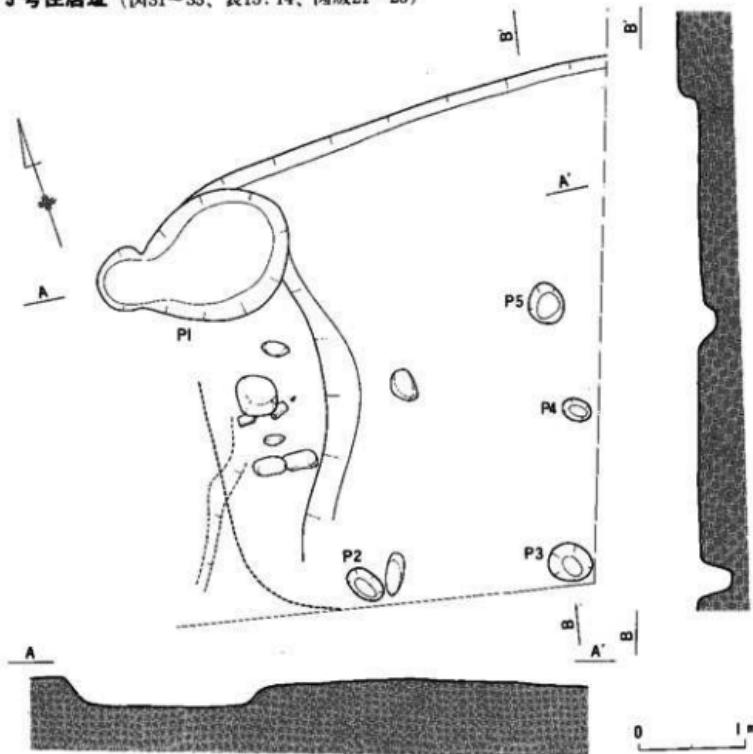


図31 第5号住居址 (1:60)

- a. 位置 J・K-48・49・50。西側で第4号住居址と切り合う。
- b. プラン 隅丸方形と思われるが、確認されたのは北壁の一部のみ。
- c. 壁面 壁高20～25cm。
- d. 床面 黒色砂質土を基盤とする。火をうけた模様で、多量の炭化材・焼土が発見されている。径8～11cm、長さ180cmのクリの丸太材の他、ブナ・ナラ・ツガ材が出土している。
- e. カマド 西壁。石組カマドと思われるが、残存状態が悪い。
- f. ピット(表11) 6個を数える。P₁からは、土師器・内黒釉・灰釉陶器破片等が出土している。
- g. 遺物 土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。土師器内黒の壺(図32-1～3、図版23-1～3)は、暗文のあるもので、丁寧な籠磨きがなされている。底部に糸切痕が残るが、その

中央部がややくぼみ、周縁がわずかに高くなっている。底部には、周縁にそってわずかに粘土を盛り上げたものだろうか？これらの壺の口縁は外反しており、その他に、図示していない外反しない口縁のものもある。又、墨書きのある壺の破片が一点出土している。土師器の裏は細かなカキ目が著しいもの（図33-3、図版23-9～10）、やや粗いカキ目のもの（図33-2）、籠削りによる粗い仕上げのものなどある。又、小形甕（図版23-4～8）でロクロ口引きによるものもある。須恵器は、内面に青海波叩目のあるもの（図33-1）が1点ある。灰釉陶器は、住居址に付属すると思われる土塙中から平瓶の破片が出土しているが、黒窓14号期のものであろう。以上の遺物から第5号住居址は、箕輪町中道Ⅲ期（註）に該当し、平安後期に属すると考えられる。尚、第32図-4の炭化した木製品は灯明台の一部と考えられる。

註 中央道遺跡調査団 1974「長野県中央道発掘調査報告書」—上伊那郡箕輪町—

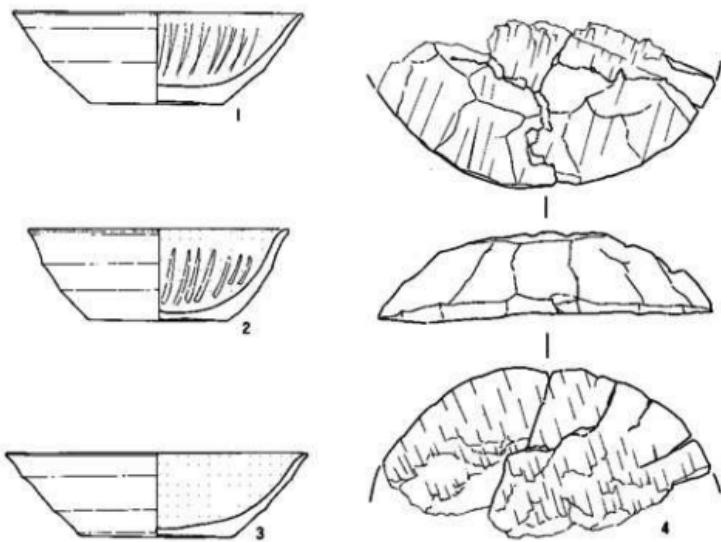


図32 第5号住居址出土の遺物 (1:3)

表13. 第5号住居址内のピット

ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	120×186	16	4	楕円形	22×28	18
2	楕円形	38×24	6	5	楕円形	40×34	15
3	楕円形	36×40	35				

表14. 第5号住居址出土の石器

番号	図番号	器種	長(m)	巾(m)	厚(mm)	重(g)	石質	完破	番号	図番号	器種	長(m)	巾(m)	厚(mm)	重(g)	石質	完破
1		打製石斧	97	36	12	50	粘板岩	破	4		スクレイバー	30	11	6		黒耀石	

2	打製石斧	81	74	21	274	安山岩	破	5	スクリーパー	16	15	7	黒耀石
3	打製石斧	54	34	18	64	蛇紋岩	破	6	剥片石器	35	17	4	黒曜石

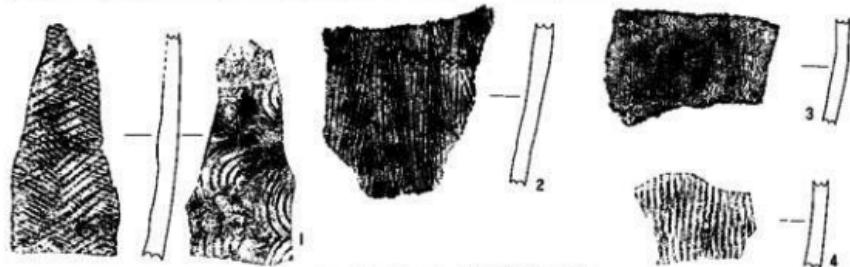


図33 第5号住居址出土の土器拓影（1:3）

第4節 その他の出土遺物

縄文時代の遺物（図34～36、図版18～20）

住居址以外からも多量に出土している。（図35・37、図版18～20）、図版18は、E・F-49～52の各グリッドより出土した土器で、第2号住居址の存在を確認する前に出土したものである。これらもまた、区画内を主として沈線でうめるもの（図版18-1～8、9）、縄文の施文でうめるもの（図17-12～18）、及び東海方面との関連性が考えられるもの（図版18-10・11）に大きく分けられる。特に、10・11は器壁がうすく、5mmほどであるが、沈線を主とするものは、8mm前後と厚い。縄文施文のものは、薄いもの、厚いものとがあり、概して小形の深鉢形のものは薄い。また、沈線を主とするものは胎土中に砂粒が含まれるものが多い。図34-4は、O-46、U46、V-47の各グリッドから出土した破片が接合した深鉢形土器である。図34-5は、P-52グリッドから出土した深鉢形土器で、頸部に隆帯による楕円形の区画文があり、胴部は縄文施文のち、細い沈線で渦巻様の施文が行なわれている。図版19-1～19は各グリッドより出土した、勝坂式期の土器で、いわゆる格沢式・藤内式土器である。これらの土器は全体の土器の出土量から見れば、5%前後の量で、極めて少ない。しかし、少ない量にせよ、この遺跡の周辺に何らかの遺構が存在していることも考えられるし、また、この遺跡が一時的な行動の場であったことも考えられる。

石器は、敲打仕上げの石斧（図版19-20・21・23）及び同じく敲打痕のある礫（図版19-24）などの工具のほかに、大小の打製石斧の破片（図版20-1～10）や剥片石器の範疇に属する横刃形の石器（図版20-11～16）など、各住居址の石器組成に共通する器種が多い。なお、遺跡全体では、石鎌は1点が出土したのみである。黒耀石の剥片は各住居址から若干出土している。（赤羽）

中世の遺物（図版24）

以下では、図版23の陶器についてふれてみたい。

1. 平瓶の底部の破片。高台は削り出しの高台であるが、欠損が甚しく高台底部の器形を窺うことのできないまでに欠失している。猿投窓で焼かれた自然釉の灰釉陶器。時期は平安後期。
2. 壺の破片で、器厚は8.5mm。胎土に石英粒が窺える。自然釉であり、器面は相当に磨滅している。産地は伊賀のものと考えられる。時期は鎌倉時代と思われる。

3. 平瓶の肩部の破片、器厚5mm。猿投窯で焼かれた灰釉陶器である。時期は平安末期。
4. 壺の破片、厚10mm。胎土に石英粒が見受けられる。焼成りは良好。伊賀の古窯で焼かれたものと思われる。時期は鎌倉時代。
5. 四耳壺の胴部の破片、焼成は良好。産地は瀬戸である。時期は鎌倉時代。
6. 壺の破片、厚9.5mm、焼成は良好で胎土に石英粒含む。色調は、常滑特有の鉄分の多い赤褐色である。時期は鎌倉時代。
7. 盆の底部の破片、厚5mm、削り出し高台の灰釉陶器で産地は瀬戸である。時期は桃山時代。
8. 瓷茶碗の破片、厚4.5mm、鉄釉でコバルトがかかっている。産地は瀬戸である。時期は江戸時代。その他の陶器 須恵器は、7~8世紀末にかけての壺・环・壺等であり、産地は一部の美濃須衛器を除き猿投窯である。灰釉陶器は、鉢・皿等で東濃の窯と思われ時期は折戸53期である。斐形陶器の破片は瀬戸・常滑産で時期は鎌倉時代。片口の破片は瀬戸の窯であり時期は室町時代。その他は、江戸時代末期の皿の破片が検出された。

(友野)

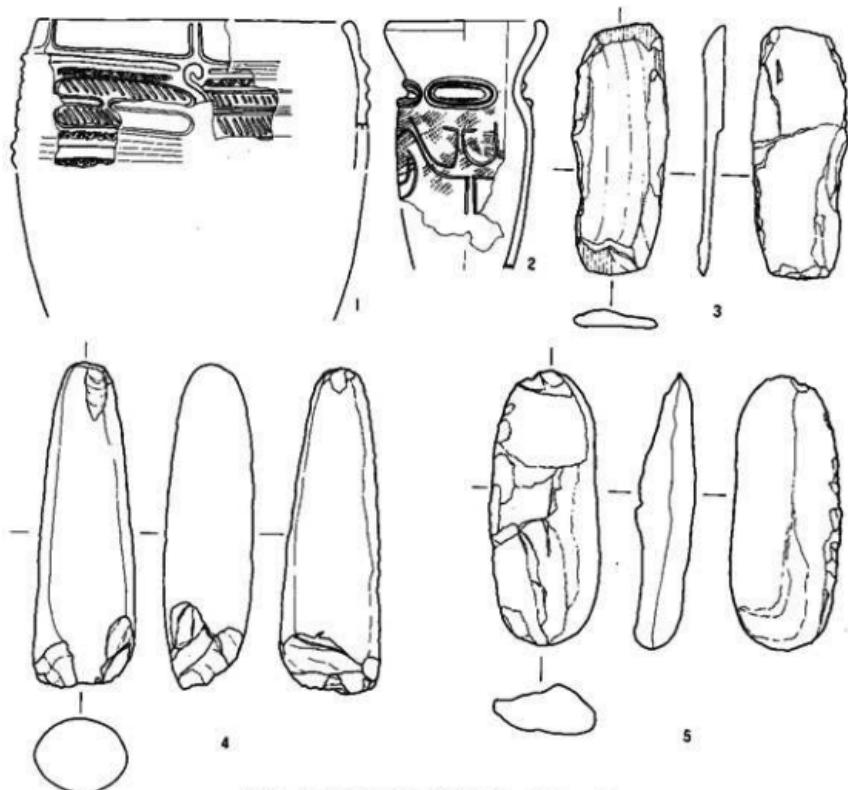


図34 その他の出土遺物（土器1:6 石器1:3）



図35 その他の出土土器拓影 (1:3)

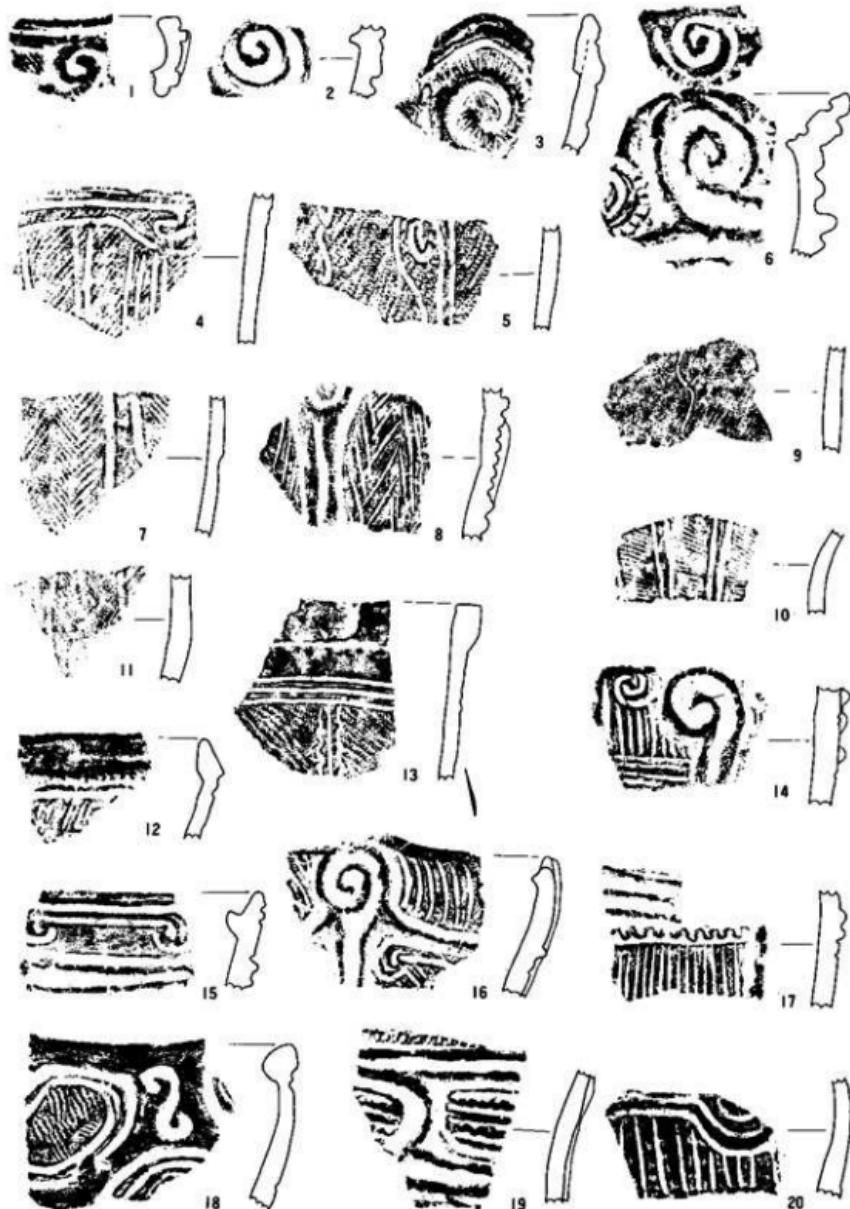


図36 その他の出土土器拓影 (1:3)

第IV章 まとめ

縄文時代中期について

遺構 発掘された中期の遺構は、第1号～第4号および第6号住居址、それに第2号土塙で、中期前半～末にいたる土器と石器が出土した。第1号～第4号住居址は、いわゆる曾利式土器（註1）を主体とする中期末のもので、第3号住居址と同心円上に重複する第6号住居址は、出土土器の上から、井戸尻III式～曾利I式期ころのものであった。（図版16）第3号および第6号住居址に近い第2号土塙は、恐らく中期後半のものであろう。なお、遺構外からは図版18に示した藤内式期前後の土器が出土している。

従って、縄文時代中期に関しては、この遺跡では少なくとも3回以上にわたっての占地があったと考えられる。それは、土器型式の上から考えられる時間に基づけば、断続的なものであつただろう。しかしながら、仮に第3号住居址と第6号住居址とか時間的に連続しないとすると、第6号住居址の同心円上に重複する第3号住居址は果してどういう意識に基づいて建てられたのだろうか。第3号住居址と第6号住居址を構築した人々が同一の集団であるにしろ、ないにしろ、住居址の同心円上の重複という例は集落研究の上で大きな問題を含んでいると思われる。

土器 第1号～第4号住居址は同期時のものとしてよいであろう。これらの住居址からは、いわゆる曾利式土器（註2）加曾利E式土器（註3）および東海地方に分布の核をもつ土器（註4）の三者が出土している。（図版4～9）それに対して第6号住居址からは、ハケ岳西南麓・諏訪湖周辺に濃密に分布する井戸尻式系の、いわゆる櫛形文のある土器と、口縁部に特徴ある隆帯文を施す曾利I式土器（註5）が出土している。第6号住居址が存続する期間中に、井戸尻III式土器と曾利I式土器が前後して作られ、使われたものか、あるいは同時に使われていたものは決め難いが、少なくとも第1号～第4号住居址に見られるような、曾利式期も後半になると、それまでの関東～中央高地という文化交錯の図式が、関東～中部高地～東海と変化し、東海地方において個性ある土器が作られ、中部高地との伝播が強くなつたと考えられる。

石器 石器は、打製石斧・硬質砂岩のフレイクに簡単な刃部を設けた横刃形石器・加工具としての乳棒状石器という三者の基本的な組成は、伊那谷の他の遺跡と変わることろがない。狩猟具としての石鎌や、解体具としてのスクレイバーの少なさという点も同様である。

集落 集落としての松戸遺跡について考えてみると、中期の住居址は5軒であり、その内第6号住居址を除いた4軒は、出土した土器からほぼ同時に營まれて

いた時期があったものと思われる。これら4軒の住居址は発掘区の東端に弧状に並んでおり、発掘区の西半部には住居址が見つからなかったことから、遠縁の立地する台地の東端にかけて環状に展開している集落の一部であると推測される。この4軒に時期的に先行する第6号住居址は井戸尻III式期～曾利I式期のもので、1軒のみ発掘された。更にこの第6号住居址に先行する藤内式土器も発掘区各グリッドから出土しており、従って、この松戸遺跡の立地する台地は、縄文中期に関しては、主として発掘区の東側で藤内式期～曾利式期にかけての、具体的な造構の構築による占地があったものと考えられる。

埋 館

いわゆる埋甕が存在したのは第2号および第4号住居址の2軒だが、第3号住居址にも「埋カメビット」らしきものが見られる。第1号～第4号住居址とも、改築等により周溝、柱穴の掘りなおしは見られず、増改築はなかつたものと思われる。

註1 主として藤森栄一編「井戸尻」(昭和40年)に依るが、最近では、神奈川考古同人会縄文研究グループによる編年試案(「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」「神奈川考古」4号 昭和53年)があり、そのほか八木光則氏(「縄文中期集落の素描(1)・(2)」「長野県考古学会誌」25・26号)、末木健氏(「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格—予察」「信濃」30巻4号)、炉形態に注目した折井敦氏(「ハケ岳南麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察」「長野県考古学会誌」28号)などがある。それらの論考によれば、曾利式土器の大きな特徴のひとつは、陸帯などで区画された内部を沈線および条線でうめるということであろう。従って、ここでは、地文が沈線を主体とするものを一応曾利式土器としておきたい。伊那谷北部に多い「唐草文土器」も一応曾利式土器の範疇に入れておきたい。

なお、松戸遺跡の第1号～第4号住居址は、米田明訓による分類(「曾利式土器編年の基礎的把握」「長野県考古学会誌」30号 昭和53年)に従えば、第III段階であろう。同じく、第6号住居址は第1段階には相当するものと思われる。

註2 註1参照。

註3 註1「神奈川考古」4号などに依る。主として縄文を多く用いてあるものをここでは、加曾利E式としておきたい。ただし、沈線文を主体とするものと、縄文を主体とするものを一集団が使い分けしていたのか、あるいは、縄文施文のものが直接的な搬入によったのかは判然としない。

註4 増子康真ほか「東海先史文化の諸段階」昭和50年などによるほか、註1参照。条線あるいは縄文施文によるものが多い。いわゆる連弧文の存在や口縁

部にも特徴的なものがある。

註5 飯島町鳴尾天伯遺跡第4号住居址（中央道遺跡調査団「中央道発掘調査報告書——上伊那郡飯島町地内その1」昭和47年）では、口縁部に降帯文のある土器の胸部に櫛形文が表現されており、また、主として諏訪湖周辺に分布する曾利I式土器と呼ばれる土器も出土している。従って、土器の上から見るこのあたりの時間的推移は、「井戸尻」（註1）以来再び整理してみる必要がありそうだ。（赤羽）

陶器について

須恵器

本遺跡出土の最古の陶器は、奈良時代の須恵器である。須恵器は、隣接する熊野守遺跡を含め、遺跡一帯から出土していることから、本遺跡付近における奈良時代の何らかの生活を考えざるをえない。

平安時代の陶器

この時代のものとして、第5号住居址出土の灰釉陶器平瓶の肩部破片がある。生産地は猿投古窯で、黒鉢78期ころのものと考えられる。従って、第5号住居址は、9世紀後半から10世紀前半にかけてのものであろう。この住居址は、昭和49年度に中央道関係で調査された熊野寺遺跡（註1）第1号住居址と、時期的には接近しているものと考えられる。

鎌倉時代の陶器

この時代のものとしては、瀬戸古窯で焼かれた灰釉の四耳壺、こね鉢の破片、伊賀古窯で焼かれた壺の胸部破片の3点がある。伊賀焼・常滑焼は、主として鎌倉時代から宮田の地へ入ってきたと考えられる。

室町時代の陶磁器

この時代のものとして、中国・宋時代の青磁の破片が出土している。中国青磁は、室町時代に常滑・古瀬戸とともに宮田へ入ってきていた。宮田村では、このほか、古町遺跡（註2）・下の段遺跡（註3.）などからも出土しており、当時の宮田の文化をしる上で重要な資料となるものであろう。

桃山時代の陶器

この時代のものは、古瀬戸の皿の底部破片が出土したのみであった。平安・鎌倉時代の陶器の出土量と比較すると、非常に少なくなっている。このことは、陶器が多数出土した地区（A～I・65～70グリッド）が、何らかの生活の場であったのは、室町末期ごろまでであったことを物語るものであろうと思われる。

今回の調査で松戸遺跡から出土した多くの陶磁器は、わたしたちに、この土地の歴史の推移を学ばせてくれた。そのひとつに、地神様の蔵骨器（鎌倉時代初期）をあげることができる。この蔵骨器を中心として、松戸遺跡から出土した奈良・平安・鎌倉各時代の遺物の内容を窺うと、奈良時代のものは主として祭器的性格を持つものが多い。次の平安時代のものは、祭器のほかに、生活に必要なこね鉢などが加わってくる傾向が窺われる。このことは、

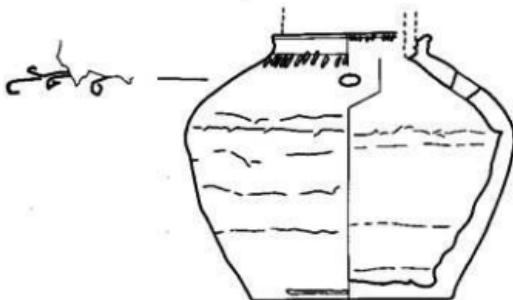


図37 地神様出土の長頸壺 (1:4)

祭祀者とその生活との関係を知る上に、ひとつの手がかりになることと思われる。鎌倉時代になると日常雑器が日立って多くなる傾向がある。それは、平安時代より更に、生活が地についていたことを物語っているのではないだろうか。また一方、地神様の蔵骨器に納められていた人骨は、熊野寺橿現・熊野寺の創建に、何らかの形で深い関係を持っていた者と考えられ、出土した蔵骨器は、熊野橿現・熊野寺の研究

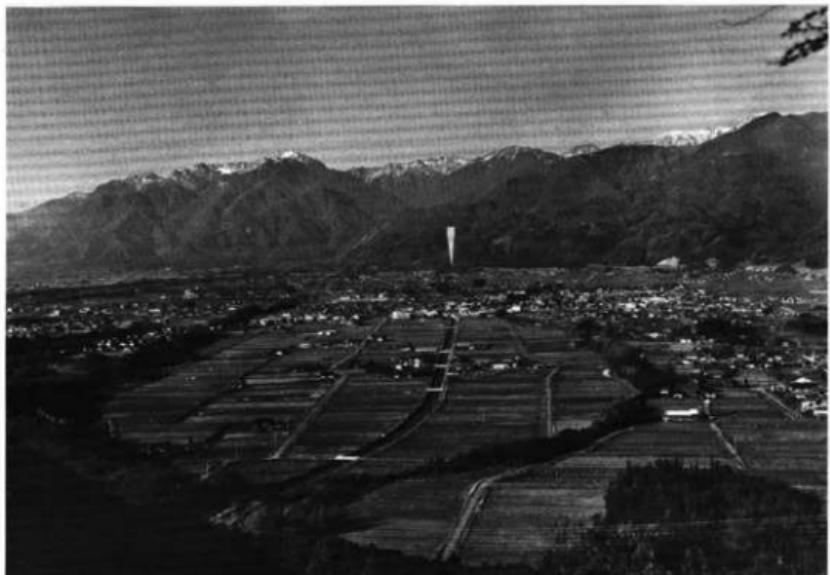
上重要な資料となつたのである。

以上の出土陶器のあり方や蔵骨器、それに、熊野寺・熊野橿現の調査（註1）と、薬師如来像・聖観音像の造像年代を考慮すれば、熊野橿現・熊野寺は、創建当時に、松戸遺跡の陶器を多量に出土した地区（A～I・65～70グリッド）にあり、室町時代末期頃、現在の位置に移転したと考えられ、今回の調査で、それを物語る有力な資料を得たことになる。

- 註1 宮沢恒之他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書宮山村その2」昭和49年
註2 友野良一他「古町・田中北遺跡」昭和47年
註3 友野良一「五升蔵・下の段遺跡」昭和51年

(友野)

図 版



▲ 遺跡の位置（東より撮す）



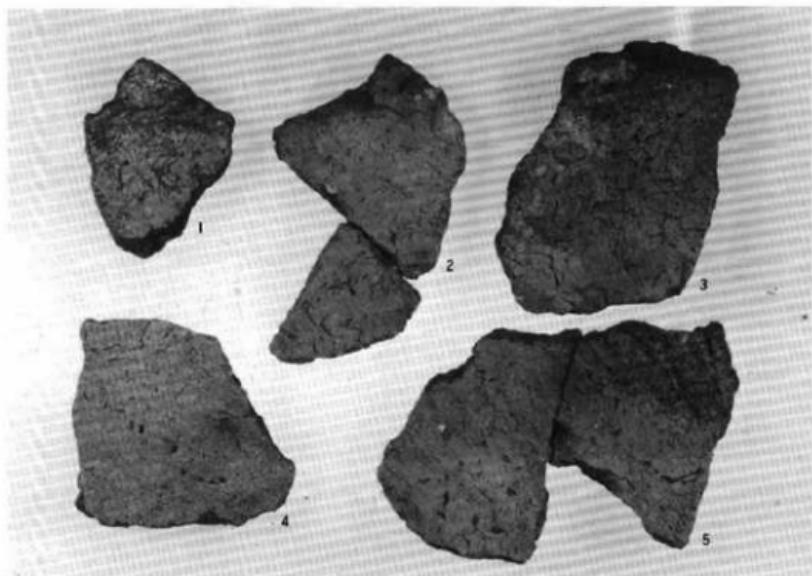
▲ 発掘の開始（西より撮す）



▲ 発掘された遺跡（北半部）



▲ 発掘された遺跡（南半部）



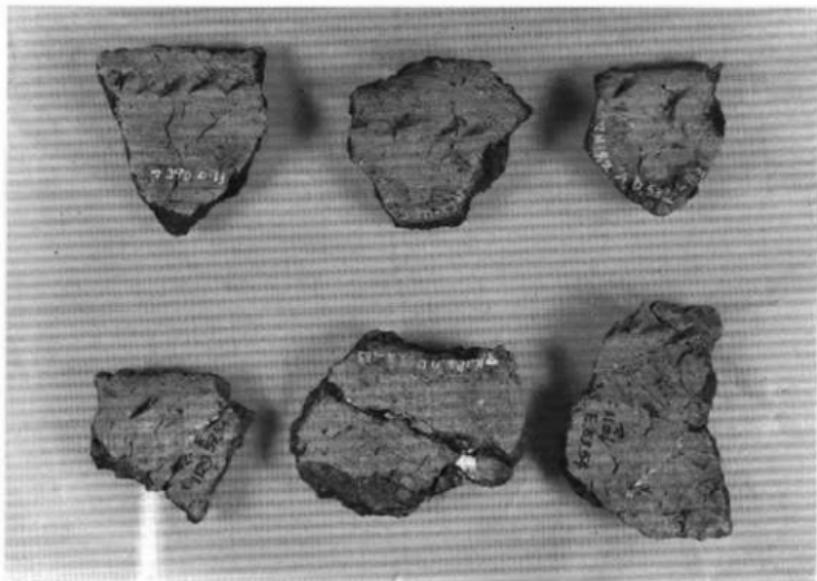
▲ 縄文時代早期の土器（表）



▲ 縄文時代早期の土器（裏）



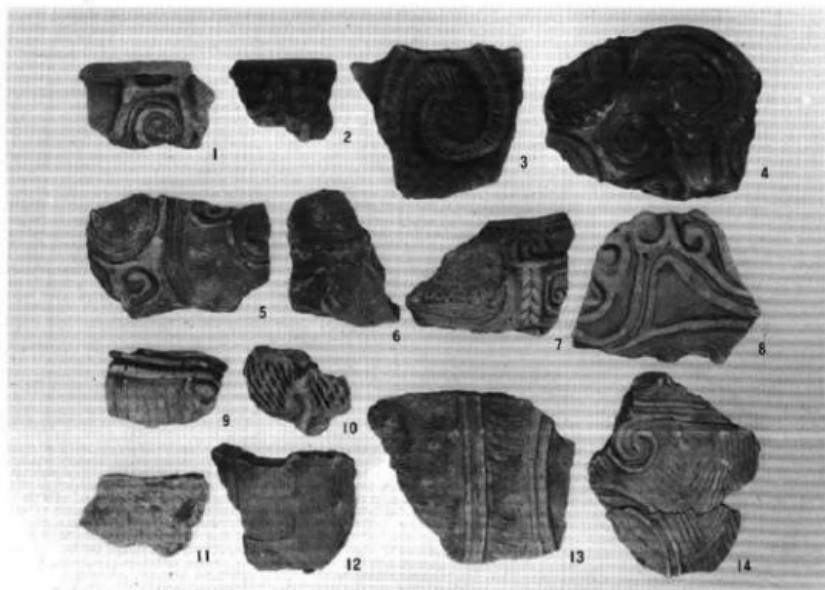
▲ 純文時代早期の土器（表）



▲ 純文時代早期の土器（裏）



▲ 第1号住居址



▲ 第1号住居址出土の土器



▲ 第2号住居址



▲ 加曾利E式土器と曾利式土器



▲ 住居址内の配石？



▲ 磐石のある埋塗の断面



1 (埋塞に使われていた土器)



2



3



4



5

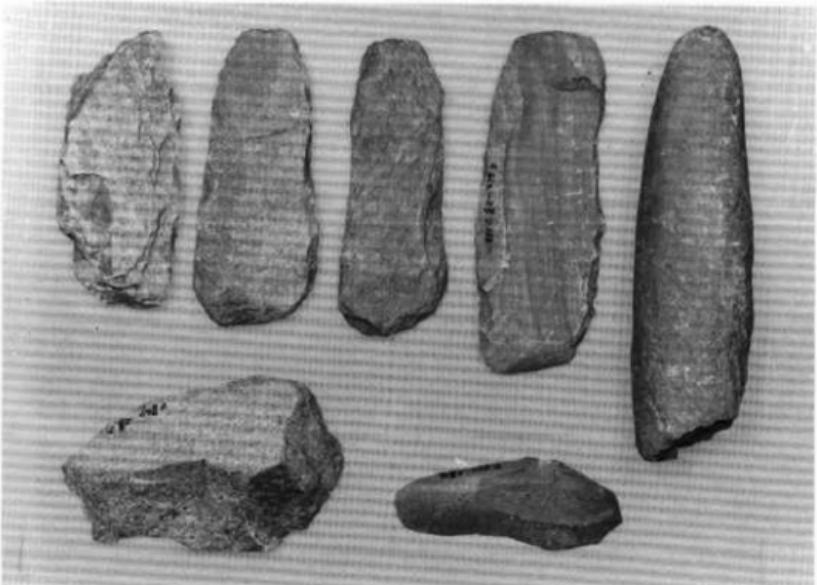


6

▲ 第2号住居址出土の土器



▲ 第2号住居址出土の土器



▲ 第2号住居址出土の石器



▲ 第4号住居址



▲ 繙石のある炉



▲ 幕平な蓋石のある埋甕

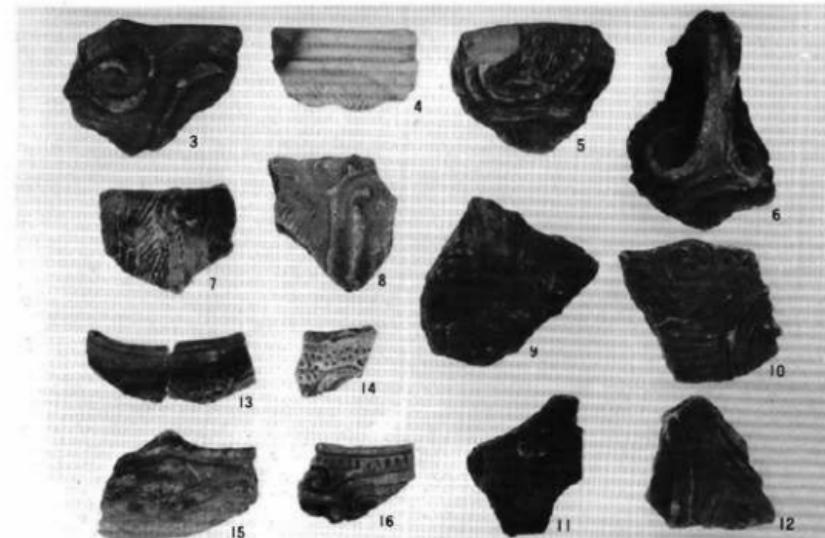


▲ 埋甕に使われた土器

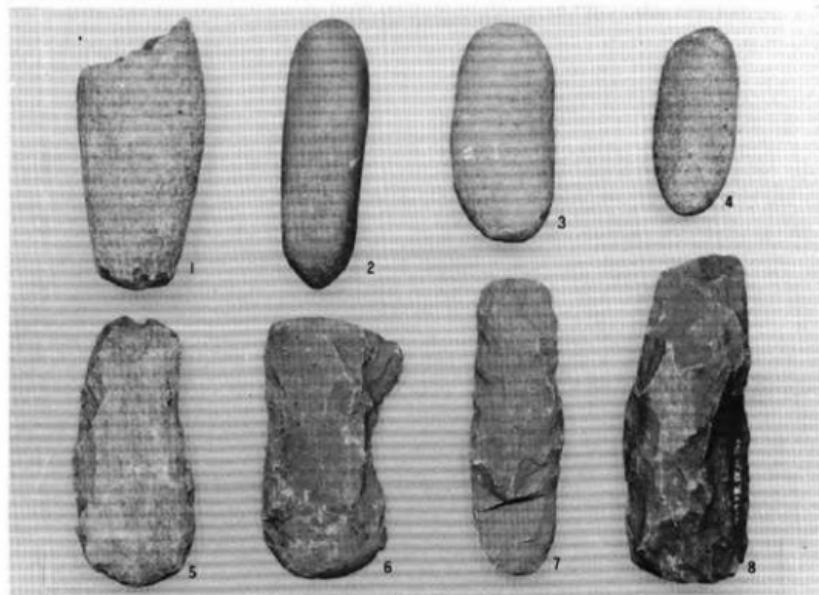


▲ 4号住居址出土の香炉形土器

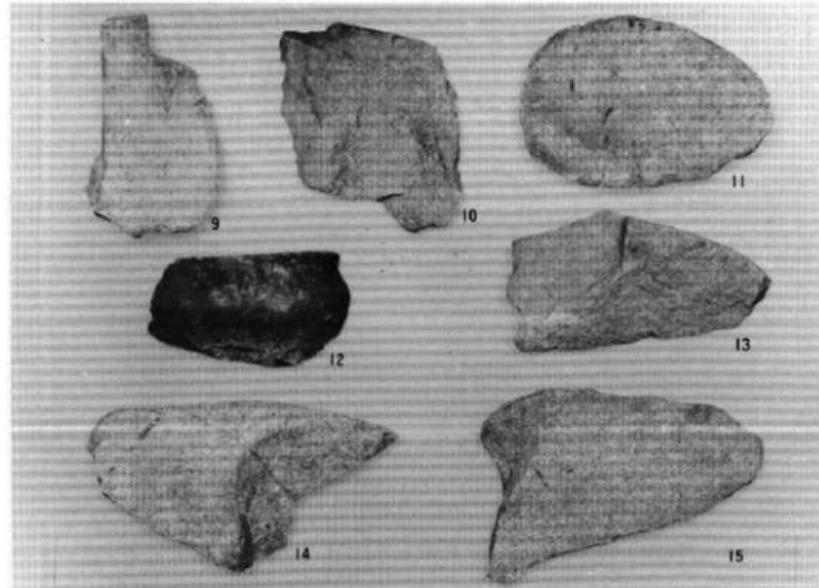
▶ 香炉形土器と立石



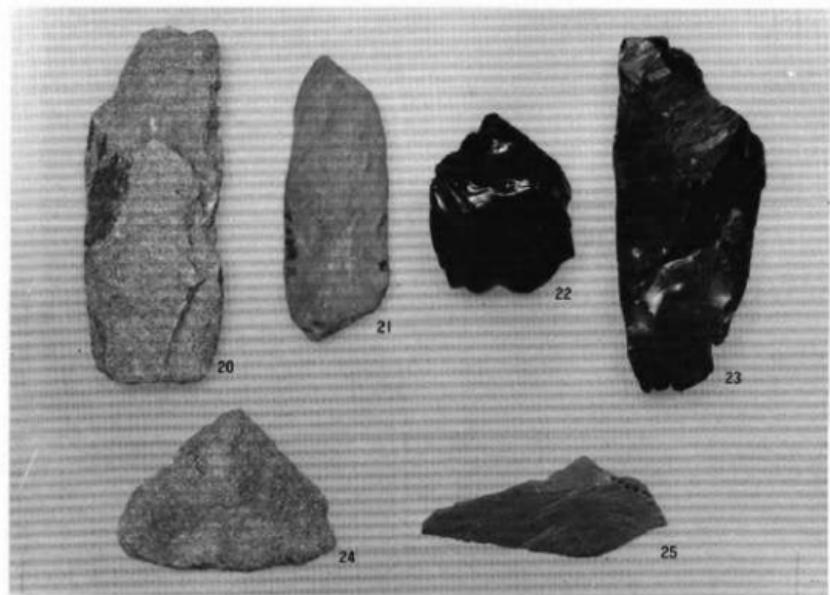
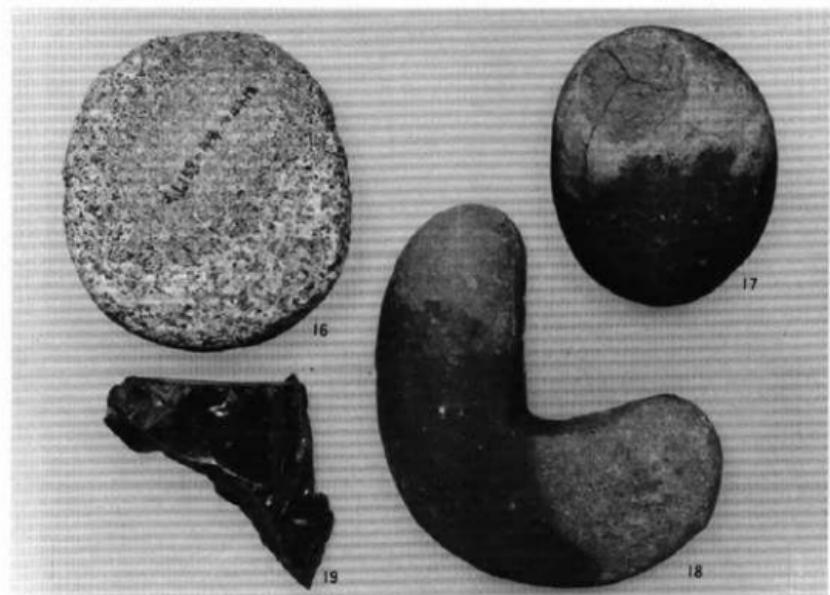
▲ 第4号住居址出土の土器



▲ 第4号住居址出土の石器



▲ 第4号住居址出土の石器



▲ 第5号住居址覆土から出土した石器



▲ 第3号住居址



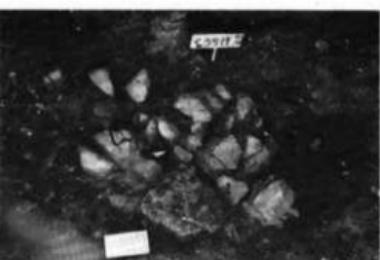
▲ 縁石の抜かれた炉



▲ 土器片の集中出土



▲ 住居址内の集石？

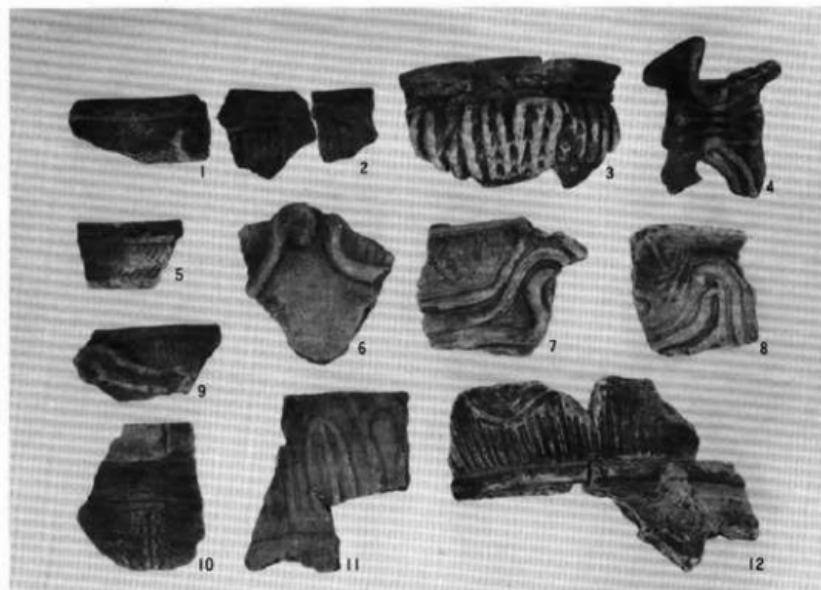


▲ 土器片の集中出土

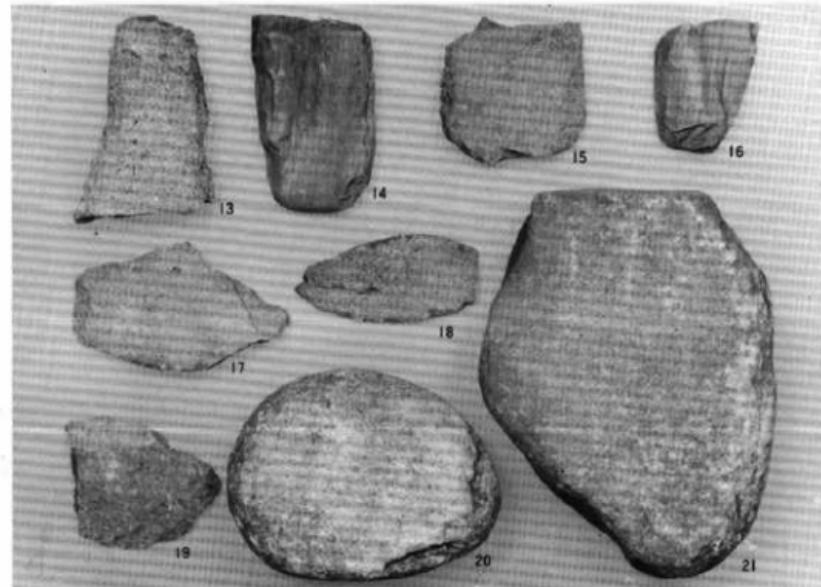


3 4 使用痕のある器

▲ 第3号住居址出土の土器と石器



▲ 第3号住居址出土の土器



▲ 第3号住居址出土の石器



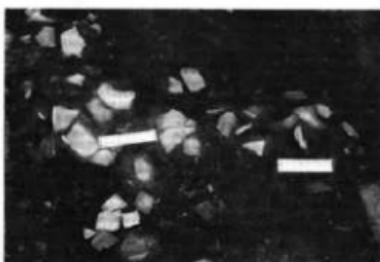
▲ 第6号住居址



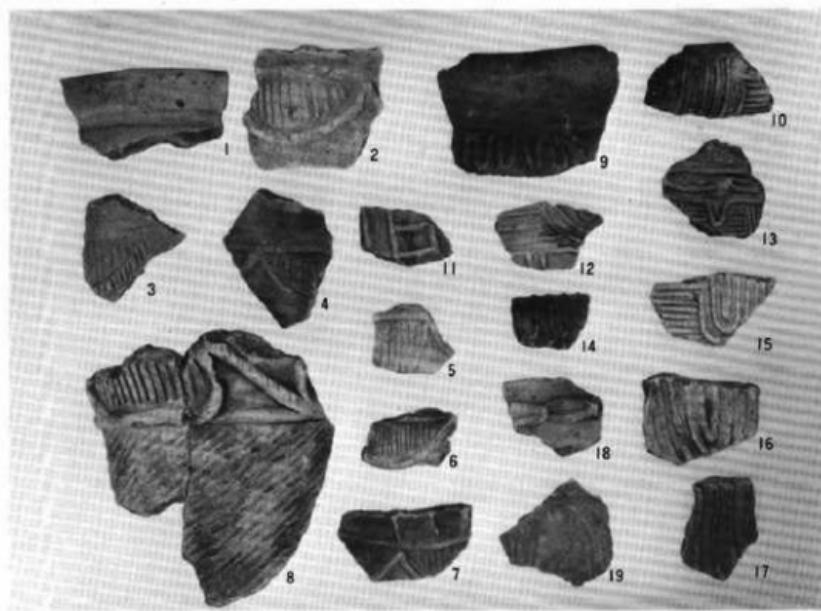
▲ 3号住居址と6号住居址の炉の重なり



▲ 縁石が二重に巡った6号住居址の炉



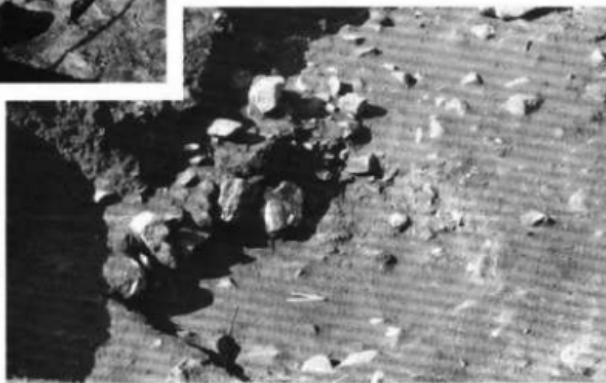
▲ 3号住居址の貼床下から出土した土器片

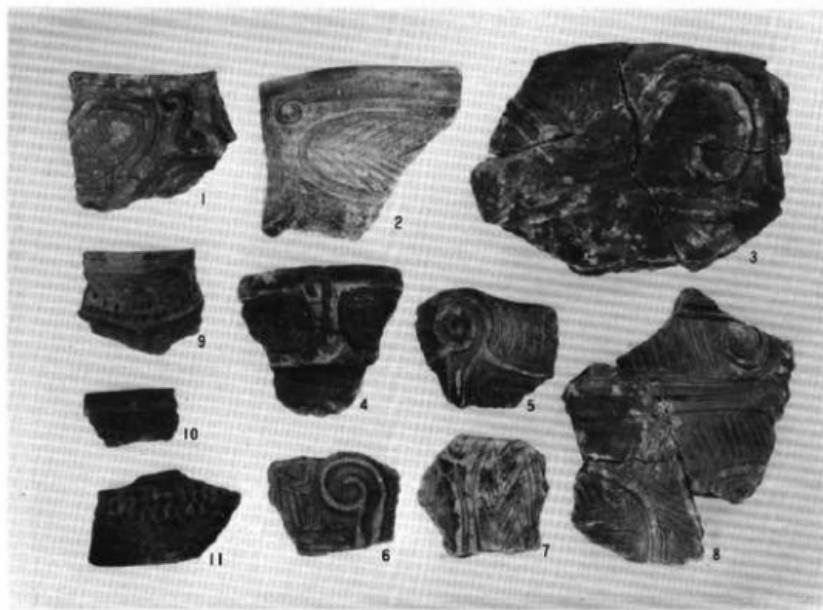


▲ 第6号住居址出土の土器

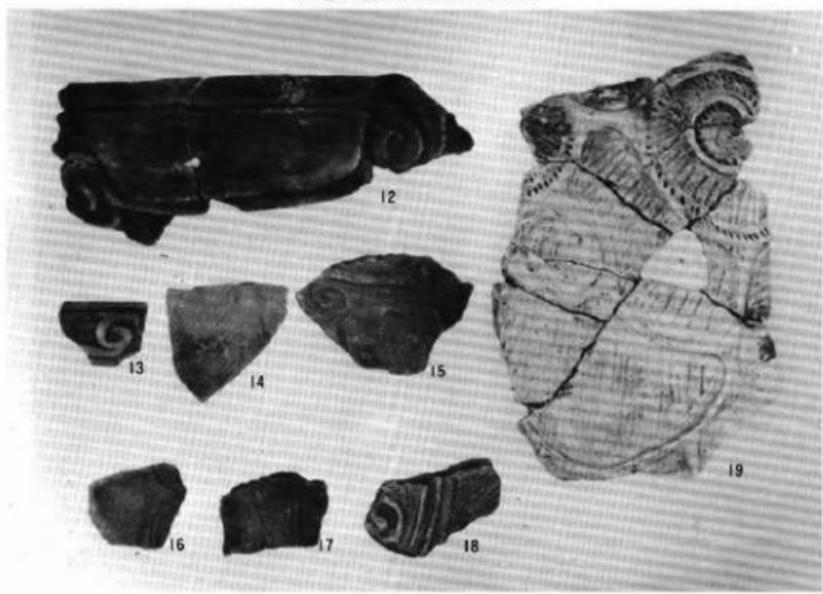


◀ 多くの甕に覆われていた2号土塙
▼ 完掘後の2号土塙

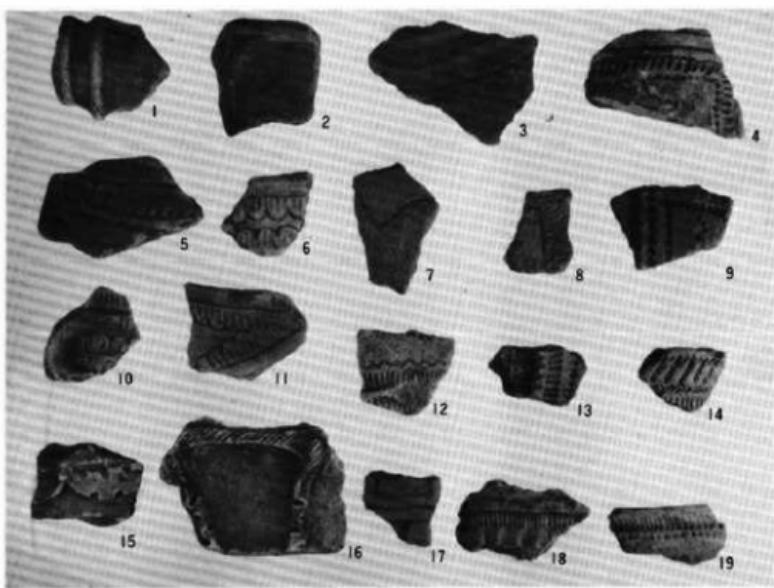




▲ 第2号住居址付近出土の土器



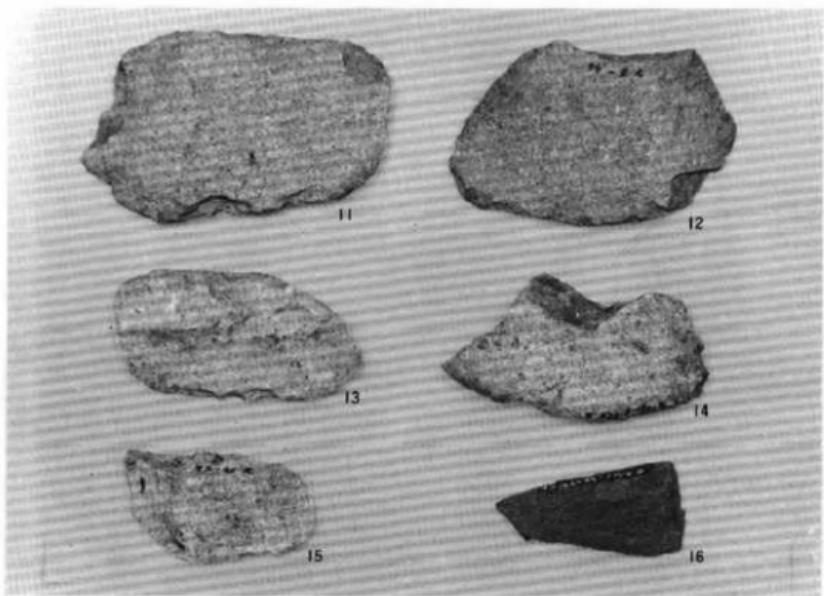
▲ 第2号住居址付近出土の土器



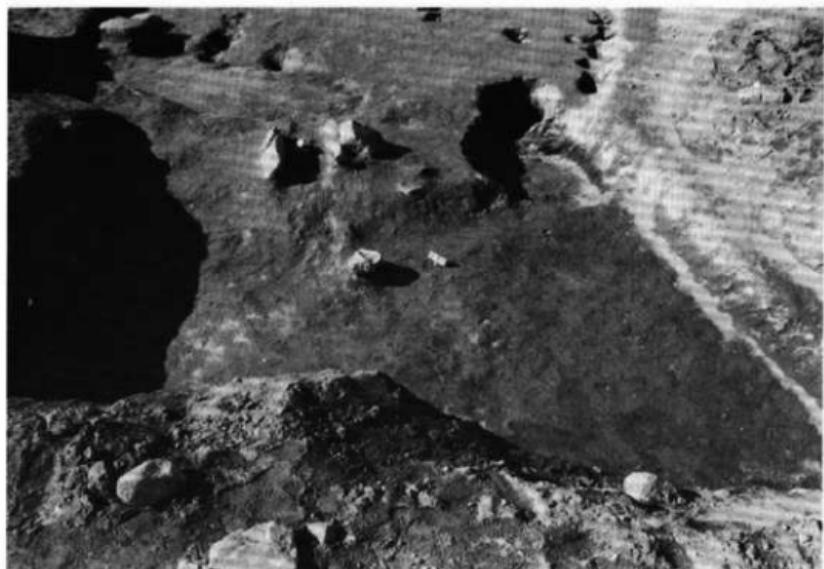
▲ 各グリッド出土の土器



▲ 各グリッド出土の石器



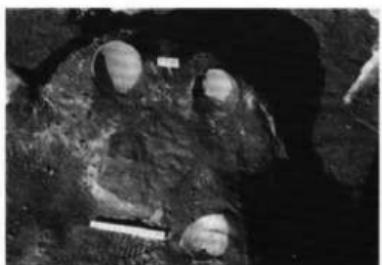
▲ 各グリッド出土の石器



▲ 第5号住居址



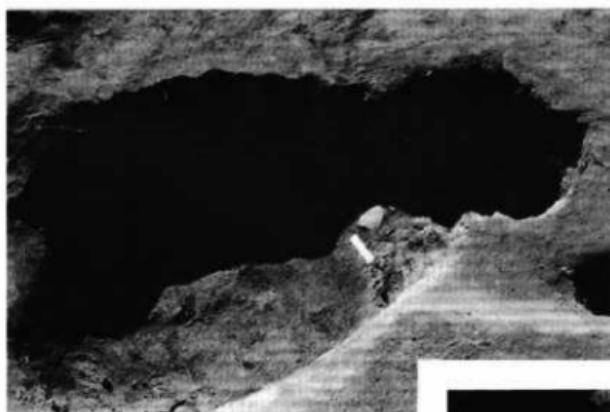
▲ 露出したカマドの石



▲ カマドの付近から出土した土師器



▲ カマドのカットと土師器の出土



▲▶ 第5号住居址
カマドの横の貯藏穴？と出土した平瓶の破片



◀ 炭化した木製品の出土
▼ 石膏で固めて慎重に取り上げる





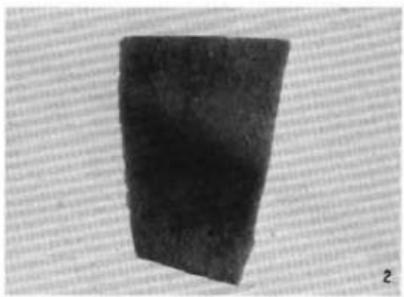
▼▲ 第5号住居址出土の土器器

▼ 第5号住居址出土の土器片





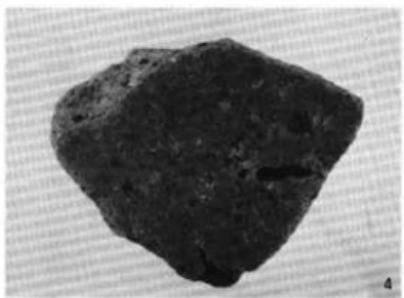
1



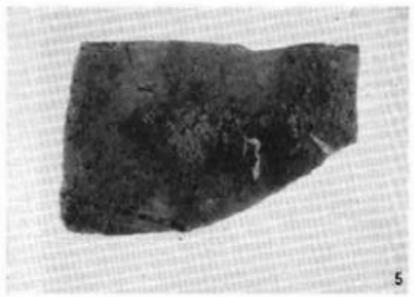
2



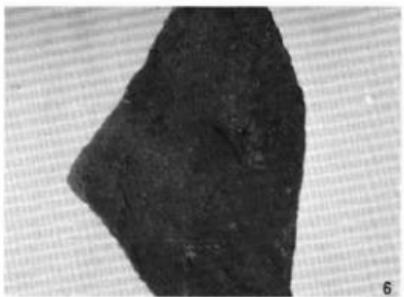
3



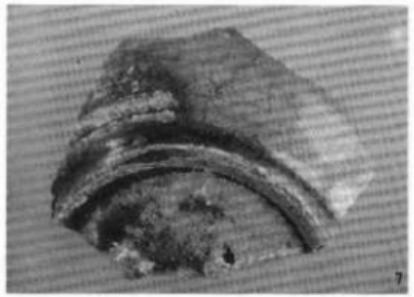
4



5



6



7



8

▲ 各グリッド出土の陶磁器



▲ 旧い地神様



▲ 新しい地神様



▲ 新聞社の取材



▲ 松戸遺跡の発掘メンバー

松戸



題字：伊藤 浩（宮田村村長）

挿絵：北条芳隆（岡山大学学生）

編集後記

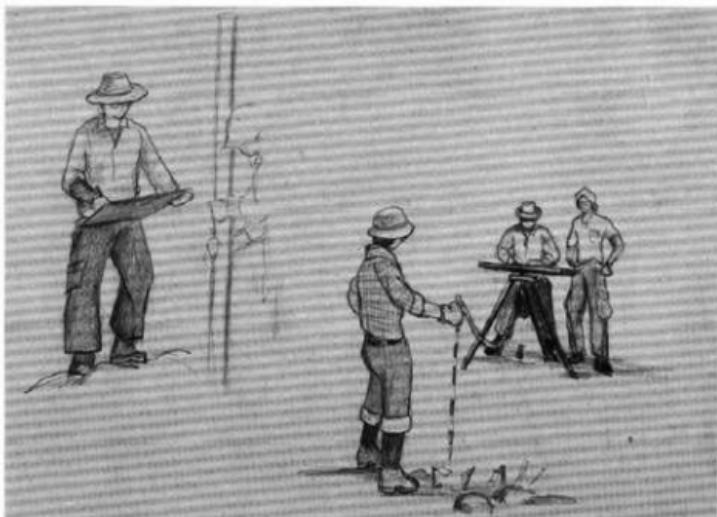
本枯しの聞こえる頃創刊されたこの「松戸」も、編集局の怠慢から、とうとうひとつ年を越し、水ぬるむ初春の候となってしまいました。

調査に先立ち、「中越」(第5次中越遺跡調査概報)に引き続き速報を出そうということになり、今回は平沢美智子さん(八千子さんの娘さん)にガリ刷をお願いしました。字に自信のない編集局ではホッとしながらも、1日の原稿を夕方までに書き上げねばならず、なかなか辛いことありました。後半、その苦労のほとんどを担当者にお願いしてしまい、担当者も1日1日が追われる思いではなかったかと思います。しかし昨日の成果を発掘参加者全員が知っての発掘は、より確実な資料を得ることができたと思います。また“おらが一言”的コーナーでの、おじいさん方の昔話は、難くなりがちな文面の“オアシス”として楽しませて頂きました。

速報を読みながらのお茶休みのなかから「松戸を振り返るよい機会だ」という意見が持ち上がり、特集号では、古文書を繕いての力作などを載せることができました。小木曾さんからは、考古学の現状に対するなかなか心鋭しい一文を頂きました。考古学の明るい将来を信じる者として、より多くの人々の深い御理解を望む次第であります。

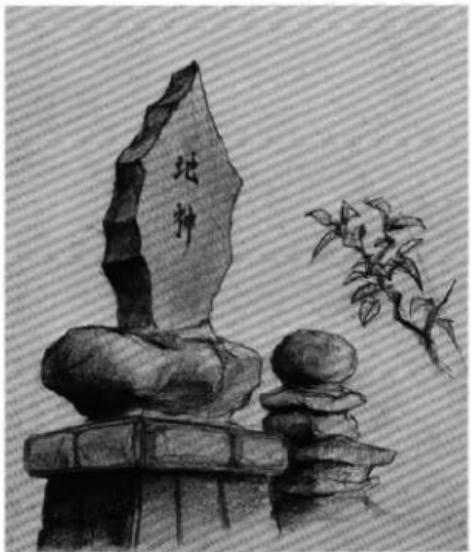
最後になりましたが、半強制的にも近い原稿の取り立てに対し、気持ちよく協力して下さいまして、ありがとうございました。

(昭和51. 3. 5. 記)



地 神 様

向 山 雅 重



宮田村の西の山ふもと、ほどよく山ふところをなす松戸のムラ。そこにふるくからひととの信仰をあつめてきた「松戸のお薬師様」。春4月8日のお薬師様の縁日には、ムラの若い衆が寺の縁にしつらえた掛舞台での手踊りや壯士芝居などが催されてにぎやかく、参詣のひとびとは夜おそくまでつづいた。何年目かの御開帳といったときは、さらににぎやかく、いつもこのお薬師様を護持しつづけてきたのは、地元の南割村をはじめとする村の人々であった。

このお薬師様—松戸山熊野寺と熊野寺権現社とを、ここに創めて祀ったのはおそらく、この地に勢力をもっていた者が主唱し、それに多くのひとびとの篤い信仰があつまってのことであろう。その勢力者が誰かということは難しい問題であるが、各地に力をもつ者が、武士として頭をもたげてきた中世、それも古い時代の熊野寺信仰の色どりの濃くひろがっていた時代と考えられる。

この熊野信仰をひとびとにひろめた人か、お薬師様創建に力をいたした人か、あるいは、松戸のムラを開いた人か、そのいずれかはわからぬが、「土地の守り神様」として、ここに「地神様」(ヒガミさま)が祀られていることは、深く心うたれることである。

「神様は縦横1.5m、高さ50cmの石積で中央に直径40cm位の丸石が乗っていて、この石は長い年月風雨に曝されてか、表面はぼくぼくしています。言伝えによれば薬師様との関係があると言われて来て居りまして、4月8日の薬師祭の日が同じ祭り日で、その夜は木製の燈籠に燈明をつけて赤飯と神酒を供えお参りをして居りました。又、正月及び我家の祝事を行う折には赤飯を藁で作ったツツコと呼んでいましたが、これに赤飯を3ヶ所に載せて居りました。」(加藤暢軒『地神様』「まつど」8号、昭和51)

この地神様を祀ってきた加藤さんが、石積みも次第に低くなりくづれかかったのでこれでは申訳ないと、近くの石工水野誠さんに協力してもらい、昭和43年4月4日の祭りにまにあうように5日に工事にかかり

「…お薬師様の先祖と関係があると聞いているがどうかなと、2人で話し合って作業をしていると、ガチャッとつばに当り、伝え聞いた通り骨つばが出てきて驚いた訳であります。言伝えも大切にしなければということ、それ以上に今後共尚いっそ地神様への行事を永久に続けようと家族

付4)

一同話し合って居ります。」(全前) この、丸石を祀ってあることは、丸石を磐座(いわくら)と見たてたものと考えられる。道祖神(どうろくじん)を祀るに、玉のような姿をした自然の石を河原などから見つけて来て祀ることが行われ、南佐久郡川上村などでこれを見たことがあり、山梨県にはその事例が多い。村の人はそうした玉石を見出すと、それを道祖神のところへもってきて祀るならわしがあるので、いくつもの玉石が祀られていることが多い。

この地神様の下に、人骨のはいった壺が埋められてあったということは、まさに、その人を神として祀ったということがあって、その神を「地神様」として、まつり伝えてきたということは、その人が、まさに伝来の通り、お薬師様にとりこの土地にとり、重要な人であったと思われる。中央道によりこの地は変貌したが、篤信の加藤さんにより地神様の祭りが続けられていることは有難い。

(宮田村教育委員長。民俗学者であり、「山ぶどう」の他数多くの著書があります)

松戸薬師の聞きがき

篠 田 徳 人

入の谷の市の瀬を歩いている時、入の野の宇津木のお薬師様が飛んで宮田へ行ったと伝えられている、という話を聞かせてくれた人があった。そこで、わざわざ市の瀬の奥、宇津木を尋ねてみた。三峰川の深い谷を右にみて、西に登ること20分位で山の峰近くに至る。山のくぼみに12、13戸の民家がかたまっている。部落の一番上にあるお寺、長福山報恩寺という。「本尊薬師妙来行基菩薩御作天平9年建立」とある。高遠古記録によれば宇津木薬師は、夫(つま)薬師といって近隣の信仰を集め、盛大なお祭りをやったらしい。寺の隣の農家の庭でガマゴザを織っているおかみさんに夫薬師のいわれを聞いたところ女と男のことだからと笑って言って細かいところの説明は答えてくれなかった。とにかく性に対する希願所であることはわかった。この薬師様はもともと戸倉山にあったのが、宇津木に飛びおりてきたものだという。報恩寺の前の大杉が落雷のために半焼になっていた。その根元を掘ってみたら美事リアルな形をした陽石が出てきた。長さ30cm、径15cm位、誰か希願の証しとして上げたのかもしれない。村人が宇津木のお薬師が宮田に飛んだときをかけてくれた話は、似た話として吉瀬でもきいた。丁度善光寺の物語のようなものかもしれない。私の母は西春近で生れたが、お薬師について、松戸薬師はマラ薬師、田原薬師は目の薬師、福地薬師はミソ薬師といわれていたと聞かせてくれた。性のなやみは、皆人に明らかに訴えられない悩みである。せっぱつまって神佛にお願いする気持ちがよくわかる。

(村の文化財保護委員長として文化財の保護に努力された。この一文は氏の最後の筆になるもの)

わたしの家の地神様

加 藤 阿 快

地神様は、宮田村2629番地字寺坂外、ここは私共の家の続きの40a程の畠地であり其の中央に祭られている神様であります。地神様をお祭りした年代は古いとは聞かされているものの何年頃かは

存じませんが土地の守り神様として丁重に祭り伝わって来て居ります。神様は縦横1.5m・平方、高さ50cmの石積で中央に直径40cm位の丸石が乗っていてこの石は長い年月風雨に晒されてか表面はぼくぼくしています。言伝えによれば薬師様との関係があると言われて来て居りまして、4月8日の薬師様の日が同じ祭り日で其の夜は木製の燈籠に燈明をつけ赤飯と神酒を供えお祭りをして居りました。又正月及び我家の祝事を行なう折には、赤飯を藁で作ったツツコと呼んでいましたがこれに赤飯を3ヶ所に載せて供えて居りました。このような行事を続けて来ましたが石積みも次第に低くなりづれかかったので、これでは申訳けないと気にして居りましたが丁度近所の石屋さんである水野誠さんに話しました。水野さんは快く引き受け下さり準備もでき、昭和43年4月8日に間に合うよう5日に工事になりました。工事の際にお薬師様の先祖と関係があると聞いているがどうかなど二人で話し合って作業をしていると、ガチャッとつぱに当り伝え聞いた通りつぱが出てきて驚いた訳ですが、言伝えも大切にしなければということ、それ以上に今後共尚いっそう地神様への行事を永久に続けようと家族一同話し合って居ります。

(地神様をずっと祀ってきた篤信家。発掘期間中、いろいろとお世話をなりました)

青年時代の薬師寺祭事の思い出

春 日 松 己

松戸山薬師寺及び熊野権現様は信仰の山として、4月8日の祭典は青年会の春の大きな行事のひとつであった。そしてまた農村青年の楽しい芸の見せ場でもあった。20日位の間、夜になると集会所に集まって踊りや余興の練習に、雨の夜も風の夜も余念がなかった。初て、4月8日の朝は織を立て灯もお堂の前に飾って祭の気分も盛り上がり、宵祭の夜を待ち、掛舞台を堂の北側に作って、一日中楽しい行事であった。松戸の全戸には家から出た人々の来客も有って、晩の余興が始まる頃には、庭一杯に観客が集まって農村の祭を楽しんだ。勿論観客といつても新田、太田切、北割、町区、遠くても諏訪形方面の青年達ぐらいであった。松戸の薬師と言えば、近郷近に知れわたった有名な松戸山熊野寺で、61年目と7年目には特に寄附金を集めて白心寺住職を頼んで供養も盛んに行なった。松戸ばかりでなく南割部落は勿論新田、北割、太田切、町部等村全体の祭りと云っても過言でない感じがした。其の由緒有った熊野寺も時代の波には勝てず、中央道の下敷きとなつて悲愴しい堂も石碑も片付けられて寂しい時代となり、心有る人々は昔を思い浮べて時代の変化に驚いている。そして松戸にも大きく地図が塗り変わる時が来て、今や遺跡の発掘調査となつた次第である。太古の人々の昔の生活が解明されんとしている時にあたり、有意義の発掘で有ることを祈る。

(宮田には、中央道開通調査の頃からの、ペテランが大勢います。春日さんもその一人)
(松戸でも事務の仕事で活躍して下さいました。)

▷おらも一言◁

老いも忘れて

太田 利雄

「松戸遺跡の発掘が10月25日から始まるが出られるかい」と百沢さんが来てくれた。秋の取り入れも済んだので、「ああ、行くから頼む」と返事をしておいた。大が星を見るようなものだから……。私も以前からなんとなく古いものに关心をもっていたので、遺跡の発掘には老骨を忘れて行くことにした。村の開場整備事業の冬場施工に伴っての遺跡の発掘



で、当初は雨が続いており、本格的な作業が行われるようになったのは11月になってからだ。駒ヶ岳の冠雪も例年になく早く、朝の出勤も冷え込みが厳しく寒気肌にしみるが、今日は何か良いものが出てないかなあと期待しながら現場へ行く。大きな薪火を燃しながら全員集まっている。顔ぶれは70才前後の老人連で、既に幾度か遺跡を手がけ気の合った者同志で、「やあ」「おお」で心が通じ合う。既に設定されたグリッドの中で、最年長の中島さんと二人での作業にかかる。上層の耕土の部分を捨てる間は何の変哲もない土砂の搬出で興味もないが、次の土層邊からばつばつ土器や黒曜石の破片が出てくる。そのうちに「やあ、出たぞ」と、隣で掘っていたKさんが言うと、皆が寄って覗き込む。大きな甕が横になっている。縄文時代中期のものとのこと。私の方も、II層III層と掘り下げていく。床面近くなるにつれて夕方までには沢山の土器・石器類が出土し、調査員が1つ1つ記入し、取り上げる。今迄のものは縄文中期のものが多く、もっと古い年代の船形式土器も出土している。詳細は、毎日速報「まつど」に掲載され皆に配布されるので、考古学初心者には有難い贈物だ。

発掘の場所は道路添いにあるので見学者が見える。中には「甕の中から小判でも出るかい」と言う者もあり、大笑いだ。我々は何の説明も出来ないが、団長さんは専門的に親切な説明をされているので、それを聞いていると大変勉強になる。仕事を終えて帰宅し、夜家内に今日の出土品の話や速報の内容説明に、今度は私が先生役でやるのが毎日の日課になっている。

(農業にいそしみながら、古文書を書き、とても勉強のおじいさん)

あんな時代に こんなすばらしいものが……

平沢 溢江

遺跡の発掘についてこれまで何の知識もなかった私ですが、このたびふとした縁でお世話になることができ、今までとは違った人生の1ページがひらけたようでとてもうれしく思います。私は五井町遺跡からお世話になったわけですが、見る



もの見るものがめずらしく、何かと馴れない毎日でただ一生懸命でしたが、先生方や皆様達の御指導により、興味も湧き、今度の松戸遺跡では多少の余裕みたいなものができる、楽しく働けてうれしく思います。今まで知らなかった遺跡のことはもとより、仲間とのふれあいも私には得がたい経験です。掘り出したものの中には、想像もつかないようなすばらしいものがあります。何も道具のない時代に、この様なすばらしいものができたとは今さらの様に昔の人達の偉大さを感じます。それと同時に、今迄何の変化もなかった土の下に眠っていた遺跡を見ると、その土にすら親しみを感じこのまま埋めてしまうのがもったないような気がします。

これからも遺跡の発掘を続けられると思いますが、もっともっと御指導下さい。そして村の人、一人でも多く遺跡のことを知ってもらいたいと思います。これから先も、よろしく御願いします。

(宮田のおばさん達はやさしい人ばかり。発掘に参加し、理解を深めてくれるのは、うれしいことです)



松戸遺跡

～緊急発掘調査報告～

昭和52年3月15日 印刷
昭和52年3月20日 発行

発行所 長野県上伊那郡
宮田村教育委員会

印刷所 伊那市 小松総合印刷㈱

